
資料・研究ノート

ビルマ国軍史 (その1)

大 野 徹*

A History of the Burmese Army (Part 1)

by

Toru OHNO

ま え が き

本稿の目的は、ビルマ国軍の沿革と現状とに焦点をあてることによって、国軍の歴史を概観することにある。こうした歴史的探求は、1962年以降ビルマの政治権力の中枢にあって国家形成の原動力としての機能をはたしている「ビルマ革命評議会」の分析にもつながり、さらにはビルマ現代史の一端を解明することにも結びつくと思うからである。

あらゆる要素が複雑にからみあって様々な形態を呈しながら形づくられてゆく歴史の中から一つの問題だけを抽出したところで、それは決して全体を俯瞰し得るような巨視的な史観を提供してくれはしない。そうした観点からすれば現象内部の相関関係にこそ重点がおかれるべきであり、synchronic な分析の重要性が改めて認識されることにもなるであろう。だが一方では、一つの問題点を diachronic な立場からとらえそれを意識的に掘りさげることによって、従来察知され得なかった因果関係を新たに究明し得る可能性もあることが考えられる。

筆者はそうした立場をとりたいと常に念じてはいるものの、それはかならずしも本稿がビルマ国軍史のすべてを網羅した総括的なものになっているということを意味しはしない。筆者としては、国軍史を一つの視点としてとりあげただけであり、ビルマ現代史解明のための資料の提示というわくを大きく逸脱するものでは決してない。本稿は、そうした意識の下にまとめられたきわめて不完全な「資料研究ノート」にすぎないものであることを、あらかじめお断りしておく。

* 大阪外国語大学ビルマ語学科

I 王朝時代の軍隊

ビルマ史の時代区分については筆者なりの見解がまだ十分に確立されていないし、またそれを論じるのが本稿の目的でもないのここでは割愛するが、(I) 王朝時代 (II) 植民地時代 (III) 独立国時代の三つに大別することは認められると思う。国軍史もまた、そうした時代区分に準じて分割記述することが可能である。もっとも、(II) と (III) の間に独立志向時代、あるいは反英独立運動期とでも称すべき章を新たに設ける必要はあるが。

今日のビルマ国軍が、王朝時代のビルマ軍と直接の関わりをもつものでないことは言うまでもない。けれども、「国軍史」という観点からすれば、王朝時代の軍隊もまた、十分に本稿の対象となり得る存在である。

(1) 軍隊の規模

時代を遡るにつれて実体が不明瞭になるのは資料に限度がある以上やむを得ない。ビルマ語の文献上はじめて軍隊が姿を現わすのは、パガン時代になってからである。もちろん、10世紀前にこの地に栄えたピュー族やモン族の国にも軍隊が存在していたであろうことは推測に難くないけれども、資料の上でそれを確認するのは著しく困難である。

パガン時代のビルマ軍に関する最初の記述は、西紀1057年にタトン国のマヌーハー王を攻めた時のアノーヤター（碑文名アニルッドハ）¹⁾王の軍勢である。この軍の規模について19世紀に編纂された『フマンナン年代記』は、次のように述べる。²⁾

水軍 兵 8,000万 舟 80万

陸軍 兵 1,800万 象 80万 馬 800万

陸軍の兵力を現わすビルマ語 gade shittan を ta-gade（千万）+shittan（8百万）と解釈すれば1,800万であるが、gade×shittan と解釈すれば80兆という膨大な数になる。

フマンナン年代記がその内容の大半を依拠した³⁾と言われる18世紀編纂のウー・カラーの『大年代記』⁴⁾では、その数は次のように示される。

水軍 兵 3,000万 舟 80万

陸軍 兵 1億 象 80万 馬 800万

象、馬、舟の数については両者一致するけれども、兵員数については両者の間に喰い違いが見られる。水軍兵力の差5千万も決して小さな数ではないが、陸軍のほうは比較にならないほど巨大な差を示す。陸軍兵力を現わすウー・カラーの表現は gade ta-hse であるが、これは一

1) U Mya (1961) pp. 3-16 ; Dr. Than Tun (1969) pp. 2-3.

2) Hmannan Yazawin (1963) Vol. I, p. 247 ; The Glass Palace Chronicles (1960) p. 77.

3) U Tet Htoot (1962) p. 54 ; Tin Ohn (1962) p. 87 ; The Glass Palace Chronicles: Introduction, p. xv ; 荻原弘明（歴史教育）p. 67.

4) Maha Yazawindawgyi, Vol. I, p. 181.

般に gade (千万)×tahse (10), すなわち1億と解釈するのが普通である。⁵⁾ これを仮に, フマンナン式に gade+tahse とすれば1千万10となり, 10という奇妙な端数がつくことになる。

いずれにせよ, この数字が“白髪三千丈”的な表現であることは疑いの余地がない。仮に, フマンナンを基に水・陸両軍の兵力を9千8百万と見積ったところで, 11世紀中期のビルマの人口は, 少なくとも2〜3億はあったという勘定になる。1824年の人口4,000万⁶⁾, 1796年800万⁷⁾, 1855年300万⁸⁾といった個人的な推測は別としても, ビルマの人口は1960年1,926万⁹⁾, 1970年2,758万¹⁰⁾という数字を示しており, 1億にはまだまだはるかに遠いのが現状である。

ウー・カラーの別書『ヤーザウインヂョウ』¹¹⁾, およびウー・カラーに先立つ15世紀の史書, マハーティーラウンタ僧正の『ヤーザウインヂョー』¹²⁾になると, こうした記述はいっさい見られない。従って, フマンナン年代記およびウー・カラー大年代記の数字が, いったい何に基づいたものなのかよくわからない。

緬紀643年(1281 A D)に行なわれたビルマ軍と元軍との戦闘では, 双方の兵力が次のように示される。¹³⁾

ビルマ軍	兵力	40万
元軍	騎兵	600万
	歩兵	2,000万

一方, マルコ・ポーロの記述¹⁴⁾によると, 彼我の優劣が全く逆になる。

ビルマ軍	騎兵, 歩兵	6万
韃靼軍	騎兵	1万2千

この時の戦いではビルマ軍が敗北している。勝敗が兵力の差にのみあるわけではないにしても, ビルマ語文献の数字はやはり大きすぎる。ちなみに, ビルマ語碑文によると元の兵力は2万¹⁵⁾であった。そして『元朝征緬録』および『元史緬伝』¹⁶⁾によると, 至元14年3月の征緬では呼図克, 信直日, 鄂爾和達などの元軍兵力はわずか700人, これに対する緬軍は兵4〜5万, 象800, 馬萬匹とある。このように資料ごとに数字が異なるので, 緬・漢いずれの数字が正しいのか判断するのは容易でない。

5) 参考までに言うと, 日本の人口も, ビルマ語では gade tahse で現わされる。Than taya, すなわち百万×百で現わされることもある。

6) J. Crawford の推計。

7) Hiram Cox の推計。

8) Henry Yule の推計。

9) ビルマ字日刊紙「オウウェー」1960. 9. 2.

10) ビルマ字日刊紙「ロウターピイドゥー」1970. 1. 13.

11) U Kala: Yazawingyok 1965.

12) Shin Maha Thila wuntha: Yazawingyaw 1965.

13) Hmannan, Vol. I, p. 352; Glass Palace, p. 173; Huber, p. 649; 萩原弘明(第5部) p. 18.

14) Marco Polo by Henry Yule; by Pauthier; Maséfied; G. E. Harvey, pp. 65-66.

15) Than Tun: Nga choñ khyam, p. 2.

16) 『元史』巻210, 列伝第97, 緬条, 『元朝征緬録』

ミインザイン（木蓮城）のシャン族三兄弟の鼎立時代（緬紀 662 年，1300 A D）に行なわれた元軍とシャン軍との戦闘では，元の兵力が次のように¹⁷⁾に示される。

元軍 兵 90 万

一方，これに対するシャン軍の兵力は，大徳 3 年 8 月の太公城総管「細豆」の上奏文¹⁸⁾によると次のようになる。

シャン軍 兵 3 万

これも，彼我の兵力間に開きがありすぎる。この大徳年間の征緬（正確には征シャン）は，結局，元側の失敗に帰している¹⁹⁾ことからみると，ビルマ側の文献の数字がかなり誇張されたものであることは疑いない。

緬紀 748 年（1386 A D），インワのミンヂースゥーソーケー王がタライン王ヤーザダイツと戦った時の軍勢について，ビルマ語文献²⁰⁾は次のように伝えている。

	(A)	(B)	(C)
タウングー路	9 軍 兵 7 万	5 軍	5 軍
ターヤーワディー路	9 軍 兵 6 万	5 軍	4 軍

やはり文献相互間に喰い違いが見られる。文献 (B) と (C) では 1 軍あたりの兵力が明らかでないが，(A) によると 1 軍は平均して兵 7 千ないし 8 千で編成されていたことになる。

緬紀 899 年（1537 A D）ハンターワディーのモン軍を攻撃した時のタビンシュエティー王がひきいたケートゥマティー・タウングーのビルマ軍。²¹⁾

陸軍	騎兵 4 軍	本隊 9 軍	兵 7 万
水軍	戦艇 200	7 軍	兵 1 万

緬紀 926 年（1564 A D）チェンマイ征圧に向かった時のシンピューシン（バインナウン）王配下の軍勢。²²⁾

親藩軍	8 軍	兵 8 万	} 計 21 軍 兵 21 万
シャン族土侯軍	9 軍	兵 9 万	
近衛軍	4 軍	兵 4 万	

この頃になると 1 軍あたりの兵力がようやく明確になってくる。親藩，シャン族土侯，近衛各軍とも，その編成は 1 軍あたり兵 1 万ずつである。タビンシュエティー王の後を継いだバインナウン王は，ビルマ人兵士のほかにタライン，シャンなどの被征服民族およびポルトガル人

17) Hmannan, Vol. I, p. 365.

18) 『元朝征緬録』；白鳥芳郎「元朝征緬録に見えたるシャン族の動向」p. 100.

19) 山本達郎「元の緬甸経略」p. 944.

20) 文献(A)は Hmannan, Vol. I, pp.417-8; (B)は Nai Pan Hla, p. 154; (C)は Binnyadala, pp. 114-5.

21) Hmannan, Vol. II, p. 194; Sein Lwin Lay, p. 219.

22) Hsinbyushin Ayedawbon, p. 364.

備兵を含め、実に10万の軍隊²³⁾を指揮していた。

緬紀1117年(1755 A D) ラングーンに向かったアラウンミンタヤーヂーのビルマ軍。²⁴⁾

(A)	陸軍	10隊	兵	1万	(B)	陸軍	11隊	兵	2万
	水軍	10隊	兵	7千		水軍	10隊	兵	1万
	本隊	20隊	兵	1万5千		本隊	20隊	兵	2万

緬紀1147年(1785 A D) アユタヤを攻撃した時のボウドーパヤー王配下のビルマ軍。²⁵⁾

メルギー路	10隊	兵	1万	馬	1千	(兵3万)
タボイ路	10隊	兵	1万	馬	1千	(兵3万)
チェンマイ路	29隊	兵	3万	馬	3千	(兵3万)
マルタバン路(Ⅰ)	11隊	兵	1万1千	馬	1千100	ラハイ路 (兵3万)
マルタバン路(Ⅱ)	12隊	兵	1万2千	馬	1千200	ターライ路 (兵10万)
マルタバン路(Ⅲ)	11隊	兵	1万1千	馬	1千100	
本 隊	40隊	兵	5万	馬	5千	

コンバウンゼツ年代記の記述によれば、合計123隊、兵員総数13万4千ということになる。²⁶⁾ 各隊とも原則として1隊千名の割合で編成されており、コンバウン時代には編隊様式がインワ時代、タウングー時代とは異なってきたことを示している。

緬紀1185年(1823 A D) および翌86年、アーチボールド・キャンプベル指揮下の英国軍と戦ったビルマ軍の兵力。²⁷⁾

ダニャーワディー路	司令官	マハーバンドゥーラ	10隊	兵	5千
コーターリー路	司令官	マハーテットーシェー	10隊	兵	2千
ハンターワディー路	司令官	ミンマハー		兵	600
タウングー路	司令官	ダニャーワディー王子		兵	1千600
ダスビュー路	司令官	ターヤーワディー王弟			?
タウングー路	司令官	タウングー王弟			?

この時応戦した英軍の兵力は、当初次のとおりであった。²⁸⁾

(Ⅰ) 第13, 38, 41, 89各マドラス欧州連隊

23) Desai, p. 68.

24) 文献(A)は Alaungmin Tayagyi Ayedawbon, p. 90; (B) は Konbaungzet Yazawin, Vol. I, pp. 161-3.

25) Konbaungzet, Vol. II, pp. 23-4; かっこ内の兵員数は Zeya, p. 88.

26) フェアーによれば、この時の軍勢は6軍10万人。A. Phayre: *History of Burma*, p. 216; ハーベイによれば、チェンマイ、モールメン、タボイ、メルギー経由の4軍。G. E. Harvey: *History of Burma*, p. 270.

27) Konbaungzet, Vol. II, pp. 365-7; 1824年のカチャール進撃におけるビルマ軍兵力は6千、うち2千はビルマ人、他はアッサムおよびカチャール人であった。ゲイト著『アッサム史』第14章。

28) F. B. Doveton, p. 6.

（Ⅱ）第3, 7, 9, 12, 18, 34, 43 マドラス連隊

（Ⅲ）第20ベンガル土民歩兵隊

その総兵力は1万²⁹⁾である。

緬紀1247年（1885 A D）第三次英・緬戦争当時のティーボー王配下のビルマ軍。³⁰⁾

司令官	ティーイマハーゼーヤチャーティン	7 隊	兵 3, 100
司令官	コーリン領主	7 隊	兵 3, 370
司令官	ミエードゥー領主	3 隊	兵 1, 250
司令官	ピンレー領主	4 隊	兵 1, 625
司令官	マハータメインペーピャッサー	5 隊	兵 2, 700
司令官	サレー領主	9 隊	兵 3, 300

王国最後のビルマ軍は、実に1万6千たらずの兵力しかもっていなかったのである。

(2) 軍隊の階級および組織

王朝時代のビルマ軍の階級についてはじめて明らかにされるのは、パガン時代のナラパティーシートゥー王の統治時代からである。ビルマ語の年代記³¹⁾は、それを次のように述べる。

- (1) 歩兵
- (2) 騎兵 10回以上の戦闘に参加した歩兵
- (3) 象兵 10回以上の戦闘に参加した騎兵
- (4) 舟兵 10回以上の戦闘に参加した象兵
- (5) 城砦指揮官 10回以上の戦闘に参加した舟兵

このことから、パガン時代のビルマ軍には、少なくとも歩兵、騎兵、象兵、舟兵、指揮官の区別があり、その身分は、もっぱら戦闘経験に基づいて認定されていたことがわかる。もっとも歩兵から城砦指揮官まで昇進するには最低40回の戦闘を経験しなければならないから、実際の運用はこうした制度とは別にあったものと考えられる。なお、象兵とは象に乗ることが、舟兵とは舟に乗ることが認められる軍人のことで、一般に村長格の待遇を受けた。また城砦指揮官は兵400人以下の城砦の指揮官であった。

インワ時代になると、騎兵のほかに楯兵、弓兵³²⁾などの専門職が現われる。そして、コンバウン時代になると、歩兵、舟兵、騎兵、弓兵のほかに、近衛兵、守備兵、監視兵³³⁾といった常備兵も出現した。

厳密な意味での「階級」は、16世紀ごろから明らかになってくる。緬紀926年（1564 A D）

29) 1824年5月、ラングーンに向かったキャンブエル將軍指揮下の軍は、ベルガル、マドラス2個師団兵員1万1千5百であった。Phayre, p. 238.

30) Konbaungzet, Vol. III, pp. 710-11.

31) Hmannan, Vol. I, p. 329; U Kala, Vol. I, p. 264.

32) Hmannan, Vol. I, p. 378; U Kala, Vol. I, p. 325.

33) U Thaung, 1969. 1. 20.

にビエンチャンを攻略したシンビューシン（バインナウン）王配下のビルマ軍は、次のような編成形式³⁴⁾をとっていた。

- (1) 兵10人につき, アチャッ (下士官) 1人
- (2) 下士官10人につき, タッフムー (部隊長) 1人
- (3) 部隊長10人につき, シッケー (副司令官) 1人
- (4) 副司令官10人につき, タツミン (司令官) 1人

司令官1人が指揮する軍隊は、兵力1万であった。そして司令官(タツミン)、副司令官(シッケー)は、共に原則として王子、王弟などの王族、または貴族(フムヂー・マッヂー)、あるいはシャン族土侯(ソーブワー)などが任命されていた。³⁵⁾司令官は時代とともに多少呼びかたが異なる。タツミンのほかに、タッフムーヂョウ、ボウミン、ボウフムー、アチャウ、シットゥーヂー、アオウなどの呼称も用いられている。

こうした編成形式は、時代ごとに多少の差異は見られるけれども、原則として同じである。緬紀1114年(1752AD)に再編されたビルマ軍の組織³⁶⁾は、次のようになっていた。

- (1) 武装兵10名につき, アチャッ (下士官) 1人
- (2) 下士官10名につき, タッフムー (部隊長) 1人
- (3) 部隊長10名につき, ボウ (司令官) 1人, シッケー (副司令官) 2人

司令官1人が指揮する軍隊は、コンバウン時代では兵力千名になっている。この点について、元白色人民義勇軍(PVO)のリーダーの一人であった作家ナツマウ・ポンヂョーは、イソワ時代およびコンバウン時代初期の構成についてその著『古代ビルマ軍メモ』³⁷⁾で次のように述べている。

- (1) 兵士10人につき, アチャッ (下士官) 1人
- (2) 下士官10人につき, アマッ (将校) 1人
- (3) 将校10人につき, タッフムー (部隊長) 1人
- (4) 部隊長10人につき, ボウ (司令官) 1人
- (5) 司令官10人を, 国王が指揮

国王配下の軍勢は、ポンヂョーの説明に従えば、兵力10万であった。この点、トーセイコウの記述³⁸⁾はやや異なる。

- (1) 兵士5人を, オウザー (1分隊)と称す
- (2) 2個分隊につき, アチャッ (伍長) 1人(兵力 10)

34) Hsinbyushin Ayedawbon, p. 365.

35) Hsinbyushin, p. 372.

36) Konbaungzet, Vol. I, p. 57.

37) Natmauk Hpon Kyaw, p. 100.

38) Taw Sein Ko, p. 255.

- (3) 伍長 5 人につき, トゥエータウヂー (軍 曹) 1 人 (兵力 56)
- (4) 軍曹 2 人につき, タッフムー (隊 長) 1 人 (兵力 113)
- (5) 隊長 5 人につき, タッイェー (参 謀) 1 人 (兵力 566)
- (6) 参謀 2 人につき, ボウ (司令官) 1 人 (兵力 1,133)

トーセイコウに従えば、ボウ（司令官）の指揮下にある軍は、コンバウン時代では 1,133 人となる。資料によっては計算方法に違いがみられるけれども、それは時代的な差であったと思われる。こうした階級は、コンバウン時代末期には³⁹⁾ほぼ固定化されていた。それは次のような序列になる。

タッフムー→タッイェー→ナガン→シッケー→ボウフムー→ボウヂョウ。

タッフムー以下の編成	{	タッフムー 1 人, トゥエータウ 2 人
	{	トゥエータウ 1 人, アチャッ 5 人
	{	アチャッ 1 人, 兵士 10 人
1 個部隊の兵力 100 人の内訳	{	タッフムー (隊 長) 1 人
	{	トゥエータウ (下士官) 2 人
	{	アチャッ (伍 長) 10 人
	{	兵 士 87 人

このようなビルマ王国軍の編成について、1885年アマラプーラに派遣された英国の外交使節団（団長 Major Arthur Phayre）の一員であった Henry Yule は次のように述べている。⁴⁰⁾

- (1) アチャッ=Officers of Ten
- (2) トゥエータウヂー=Captains of Fifty
- (3) ボウ=Centurions, Two or three Bos under a Bogyi
- (4) ボウヂー=Commandant in a corps of Five hundred men

これを整理すると、次のようになる。

- (1) 兵士 10 人につき, アチャッ 1 人
- (2) 兵士 50 人につき, トゥエータウヂー 1 人
- (3) 兵士 100 人につき, ボウ 1 人
- (4) 兵士 500 人につき, ボウヂー 1 人

王朝時代、特にコンバウン時代におけるビルマの兵士たちは、特定の階層を除いて職業軍人ではなかった。クロフタード⁴¹⁾によると、文官と武官との間には何らの区別もない。ビルマ

39) 緬紀1236年 (1874 AD) に書かれたシャン州センウィー駐屯ビルマ軍の編成に関する貝葉。編成原理と実際の兵力とは一致しない。

40) Henry Yule, (1858) p. 249.

41) Crawford, p. 413.

軍は、現実にはこの国の成人男子全員によって構成され⁴²⁾、男子は召集されれば兵役に応じるのが義務であった。⁴³⁾ ビルマ人兵士は本来農民であって、必要な場合にのみ従軍する性質の予備役または在郷軍人的存在であった。

こうした兵士たちの地盤である上ビルマの社会機構⁴⁴⁾は、当時次のようになっていた。

(1) アス・アフムダン＝正規の公務に服する階級。

1) 軍務に服するもの＝ミイン・アス（騎兵）、テナッ・アス（歩兵）、アミャウ・アス（砲兵）、シン・アス（象兵）、フレ・アス（舟兵）など。

2) 軍務以外の公務に服するもの＝ラマイン（王領地の農民）、サドーガイン（宮廷料理人）など。

(2) アティー＝納税はするが公務には服しない。緊急時のみ軍務に服する階級。

アス・アフムダンは、各自の身分に応じてそれぞれの上司が決まっていた。例えばミイン・アス（騎兵）の場合であればミイン・ガウン（騎兵長）、ミイン・ウン（騎兵司令官）の配下であり、ダイン・アス（楯兵）であればダイン・ガウン（楯兵長）、ダイン・ウン（楯兵司令官）の指揮をうけた。軍務以外の公務に服する者の場合も同様であった。例えば、ラマイン（王領地の耕作者）は国王の任命をうけたラマイン・ウン（王領地長官）の統治下にあった。⁴⁵⁾

一方、アティーは正規の軍人ではなかったが、緊急の場合にはトゥエータウヂー (sergeant) として行動するミョウ・トゥーヂー（町長）指揮下の郡単位の Non-professional Army に従軍した。⁴⁶⁾

こうしたアスやトゥエータウ制度は、もともと兵士達が謀反をおこさぬようにとの趣旨から設定⁴⁷⁾されたものであった。トゥエータウ（血盟）制度はニャウンヤン時代からすでに存在していたが、コンバウン時代になるといっそう盛んになった。緬紀1126年（1764A D）29組、緬紀1146年（1784A D）8組、緬紀1148年（1786A D）3組、緬紀1200年（1838A D）1組編成されている。⁴⁸⁾ けれども、トゥエータウ1組の人数はかならずしも一定してはいなかった。少ない組で15人、16人、多い組では62人、65人というように不揃いなのが特徴である。トゥエータウは、一般兵士のほかにウンヂー（政務官）、ウンダウ（政務補佐官）、アトウインウン（宮内官）、ミョウザー（領主）、ミインウン（騎兵司令官）、シンウン（象兵司令官）などの重臣たちによって編成される⁴⁹⁾こともあった。一般のトゥエータウ1組の中心は「トゥエータウヂー

42) *Ibid.*, p. 414.

43) Shwe Yoe, p. 506.

44) Taw Sein Ko, pp. 233-4, 261; Furnivall, *An Introduction*, p. 31; Furnivall and Pe Maung Tin, *The Garland of Zambudipa*; D. G. E. Hall (1956) pp. 134-5.

45) Mya Kay Tu, p. 182.

46) Cady (1958), p. 35.

47) Nyaungyan Ayedawbon, pp. 409-410.

48) Konbaungzet, Vol. I, pp. 356-368, 559; Vol. II, pp. 39, 583.

49) Konbaungzet, Vol. II, p. 583.

ー」で、通常ミョウウン（領主）、ダイン・フムー（楯兵長）など、職種別の長が任命されていた。このトゥエータウヂー（sergeant）の上にたつのが、兵100人を指揮するタッフムー（lieutenant）で、その上官は兵250人を指揮するテナッ・サイエー（captain）であった。⁵⁰⁾ ボウ（colonel）はたいていが文官であり、テナッ・ウン（Commanding General）は通常4人いるウンヂー（政務官）の一人か、またはウンヂーと同格の重臣が任命されていた。⁵¹⁾ 例えば1871年に使節団長として欧州に派遣された⁵²⁾ 政務官のキンウン・ミンヂーは、緬紀1236年（1874A D）にテナッ・ウンに任命されている。⁵³⁾

コンバウン王朝時代のビルマ王国軍は、ファーニバルによれば、まだ「中世的」⁵⁴⁾ 存在にすぎなかった。だが、そうした「中世的」軍隊でさえも、ビルマの英領化と共に存立の基盤を失ってしまう。ビルマの英領化は、ビルマ農村伝来の社会機構を徹底的に破壊してしまったからである。英領ビルマの村落制度は、統治上の便宜、すなわち英国がこの国を統治し易いようにするため、1886年に新しく創設されたものであった。⁵⁵⁾

Ⅱ 英領植民地時代の軍隊

英領時代のビルマの軍隊は、その規模も組織も、すべて宗主国の便宜すなわち英国の権益を保護し植民地行政に奉仕するものであった。

英領化直後のビルマについて、ハーベイやクロスウェイトは、次のように言う。⁵⁶⁾

「英国がビルマを占領して以来、軍隊の必要はなかった。19世紀は誠に平和であった。2700マイルにわたる国境地域は、ほとんど無人の地であった。だから、ビルマ全土には英人2個大隊とインド人4個大隊からなるわずか2個旅団がおかれている⁵⁷⁾ のみで、しかも両旅団ともビルマ中部に駐屯していた」とか、「上ビルマに駐屯していた軍隊は、それまで全部で14,000名であった。十分に武装した、あるいは組織された敵はどこにもいなかった。2～300名の英軍が、激しい抵抗を受けたり大きな損害を被ったりすることなしに、北から南へ、東から西へと行き来することができた」などと。

だが、現実はかならずしもそうではなかった。1885年11月28日ブレンダーガスト將軍によって最後のビルマ国王ティーボーが拉致された⁵⁸⁾ 後、英国の統治に反抗する現地民のゲリラ活動

50) Cady (1958), p. 35.

51) *Ibid.*, p. 35.

52) Kinwun Mingyi's London Diary, Vol. I, II.

53) Konbaungzet, Vol. III, p. 414.

54) Furnivall, *Colonial Policy*, p. 178.

55) *Ibid.*, p. 74; Furnivall, *An Introduction*, p. 30; ビルマの行政制度は、C. Crosthwaite によって整備された。Cady, *Southeast Asia*, p. 395; Hall, *A History of Southeast Asia*, pp. 693-4; Crosthwaite, p. 23.

56) G. E. Harvey, *British Rule*, p. 40; Charles Crosthwaite, p. 14.

57) ビルマの国防は、インド軍2個旅団、兵員1万ないし1万1千名によって受け持たれていた。原住民連隊のうち7個大隊は、グルカ、シク、パタン、パンジャブ回教徒などで構成され、ビルマ北部に配置されていた。J. G. Scott, p. 158.

58) E. C. V. Foucar, *They reigned in Mandalay*, pp. 146-158; Cady (1958), p. 121; Hall (1956), p. 130; D. P. Singhal, p. 82; Htin Aung (1965) pp. 91-92; G. Coedès, p. 189.

が各地で続発した。⁵⁹⁾上ビルマでは、軍隊と武装警察隊とを合わせて1888年だけで死者106, 負傷者218名の犠牲者を出している。⁶⁰⁾そして同期間中射殺された叛徒の数は312人, 逮捕された者721人にのぼった。それに, カチン, チン, シャンなどの山地民もまだ新しい支配者に慣れていなかった。⁶¹⁾いずれにせよ英領ビルマの行政制度が確立されるまでの間, 治安の維持は「治安警察」だけに任せてはおけなかった。それにビルマ駐屯軍の兵力も, まだ十分ではなかった。こうして1886年2月には, 1隊561名から成る「武装警察隊」(Military Police)がインド軍から募られ, 1隊はチンドゥイン地区に, もう1隊はマンダレーに配置された。⁶²⁾同時に北インドで新たに2,200名の武装警察隊が募集された。こうして上ビルマ司政官の下には, 正規兵以外に約3,300名にのぼる武装警察隊が配備されることになった。⁶³⁾

こうした治安対策のほか, 一方では国境警備の必要性があった。特に, 従来, ビルマを朝貢国とみなしてきた⁶⁴⁾中国との国境問題は重要⁶⁵⁾であった。宋時代における緬甸の入貢⁶⁶⁾, 元時代至元年間の征緬⁶⁷⁾は別としても, 明時代洪武26年の緬臣「板南速刺」の進貢, 同27年土酋「卜刺浪」の緬中宣慰使司任命, 永楽元年緬酋「那羅壇」の遣使入貢⁶⁸⁾, そして清時代乾隆32年の將軍「明瑞」の征緬⁶⁹⁾, 乾隆52年の入貢⁷⁰⁾, 乾隆55年の緬酋「孟雲」の国王勅封⁷¹⁾などは, ビルマに対する中国の「宗主国」としての立場を深めさせるものであった。だから, ビルマの英領化は中国にとっては誠にゆゆしき事態であり, 「清政府が英国の南緬併呑時, 緬は朝貢の国なりとの声明を発せざりしは既に一大失態」⁷²⁾なのであった。

こうして, 北部国境では6個大隊の国境警備「武装警察隊」がパトロールにあたることになった。将校はインド軍から来ていたが, 兵士には現地住民が徴募されていた。⁷³⁾内陸部でも治安維持のため, 兵士4,000人の軍隊と数個大隊の Military Police⁷⁴⁾がおかれていたが, その内の4分の1はカレン人であった。⁷⁵⁾

59) Htoon Nezin, 1963. 3. 27; U Soe Maung, Wuntho Sawbwa; Aye Than; H. Fielding, p. 58; W. S. Desai, pp. 244-249; Harvey, Outline, p. 184.

60) Crosthwaite, p. 98.

61) Dorothy Woodman, pt. 4.

62) Crosthwaite, p. 15.

63) *Ibid.*, p. 15.

64) Dorothy Woodman, p. 247.

65) Crosthwaite, p. 21.

66) 『欽定宋史』巻489, 列伝第248, 浦甘条

67) 『元史』第210, 列伝第97, 緬条; 『元史外夷伝』

68) 『明史』巻315, 列伝第203, 緬甸条; Huber (BEFEO 1904), pp. 429-432.

69) 『聖武記』巻6, 乾隆征緬甸記(上); M. C. Imbault Huart, *Histoire de la Conquête de la Birmanie par les chinois*, pp. 135-178.

70) 『国朝柔遠記』巻5.

71) 『聖武記』巻6, 乾隆征緬甸記(下).

72) 張鳳岐著, 種村保三郎訳『雲南国境紛争史』p. 66.

73) G. E. Harvey, *British Rule*, p. 41.

74) この「武装警察隊」は, 1888年には17,880名にふやされた。Charles Crosthwaite, p. 95.

75) Harvey (1946), p. 41.

こうした原住民部隊の編成は、第一次英緬戦争当時からはじめられている。その第1陣はアラカン人による「アラカン軽歩兵部隊」の編成（1824 A D）⁷⁶⁾であった。そして、第2陣はテナセリム地方のタライン人部隊であった。タライン（モン）人部隊の編成は、「タライン人が体格的にすぐれており良き兵士になり得る素質をもっているから、タライン人部隊の編成が順調にいけばビルマ全土の国防はタライン人に一任できる」という Commissioner の勧告にもとづいて1839年にはじめて行なわれた⁷⁷⁾ものである。だが、この部隊は1848年には解隊されてしまった。⁷⁸⁾

1852年の第二次英緬戦争勃発とともに、この「原住民部隊」の徴兵問題が再燃した。第一次英緬戦争当時の「アラカン人部隊」がよく働いたからである。こうして、ペグーで「ペグー軽歩兵部隊」が編成された。⁷⁹⁾しかし、アラカン人部隊も、ペグー部隊も、第二次英緬戦争終了後には無用の存在となったため、共に1861年に「警察隊」に切り換えられている。⁸⁰⁾

第三次英緬戦争の際、カレン人部隊が編成された。⁸¹⁾カレン人部隊は、すでに1857年に2個中隊（200名）が編成されている。だが1886年のカレン人募兵は新しい形態をとっていた。上ビルマを中心に国内が反乱状態に陥るや、有能なアシスタントとしてのカレン人の能力が再認識され、1891年にはカレン人の Military Police が新たに1個大隊編成されている。カレン人は、訓練の面でも、戦場の忍耐性でも、そして勇敢さにおいてもすぐれた才能を発揮した。⁸²⁾カレン人兵士たちは1896年にインド大隊の中に編入され、次第に軍事教練に習熟していった。⁸³⁾

ビルマ人は、1887年までは入隊を認められなかった。⁸⁴⁾ビルマ人による唯一の「正規軍」は、1887年に徴募された工兵1個中隊だけである。⁸⁵⁾だが、これはエリートの軍隊であった。兵士はすべてビルマ人から成り、しかもその大半はティーボー王配下の元兵士たちであった。⁸⁶⁾この工兵1個中隊を除いて、ビルマ人には兵營の門は閉されていた。わずかに、1914年に3個中隊までふやされた⁸⁷⁾のが関の山であった。このように、ビルマ人が軍隊から閉め出された理由については、いろいろな説が出されている。曰く、ビルマ人は訓練に耐えられなかった⁸⁸⁾、ビルマ人は軍隊生活に関心をもたなかった⁸⁹⁾、兵士としては山地民に劣っていた⁹⁰⁾等々であ

76) Furnivall, *Colonial Policy*, p. 179; Tinker, p. 312.

77) *Ibid.*, p. 179; Tinker, p. 313.

78) *Ibid.*, p. 179

79) *Ibid.*, p. 180

80) *Ibid.*, p. 180

81) Tinker, p. 313.

82) Crosthwaite, p. 131.

83) Furnivall, *Colonial Policy*, p. 181.

84) Cady (1958), p. 140; 大野徹「カレン民族の独立闘争史(その1)」p. 368.

85) Tinker, p. 314.

86) *Ibid.*, p. 314; G. E. Harvey (1946), p. 41.

87) Furnivall (1956), p. 181.

88) Cady (1958), p. 140; Scott, *Practical Information*, p. 159; D. G. E. Hall (1956), p. 167.

89) Harvey (1946), p. 41.

90) E. C. V. Foucar (1956) *I lived in Burma*, p. 105.

る。だが真実は、ビルマ人の徴兵は困難で厄介でしかも高価につく⁹¹⁾ということであり、同時に、これこそ最も大きな理由であったのだが、ビルマ人は宗教的にも種族的にも統一されており、民族としての同一志向性をもっていた。言い換えると、こうした人々によって編成される軍隊には、英国としては信頼がおけなかった⁹²⁾のだ。むしろ、英国人の立場からすれば、ビルマ人からは武器を取り上げる必要があった。⁹³⁾

1916年から27年にかけてこれらの現地民軍隊は、「ビルマ・ライフル銃4個中隊」になった。彼らは第一次大戦中メソポタミア、パレスチナで活躍した。⁹⁴⁾特に、カレン人の台頭は目ざましいものがあった。貧しい山地民は、一定の収入が入る軍隊にこぞって志願した。だが、生活水準の高いビルマ人は給与には不満だった。1925年、ビルマ・ライフル銃隊の募兵は、カレン人、カチン人、チン人にのみ限られ⁹⁵⁾、ビルマ人の募兵は完全に打ち切られてしまった。⁹⁶⁾そして1927年には経済的理由からビルマ人の工兵隊が解隊され⁹⁷⁾、27年から37年にかけてビルマ人は「正規軍」から完全に排斥されてしまった。⁹⁸⁾武装警察隊(Military Police)だけは戦時中もビルマ人に門戸を開いていたが、戦後はここも門戸を閉じた。⁹⁹⁾ビルマ・ライフル銃隊も、第一次大戦後3個大隊に縮小された。この頃のライフル銃大隊の構成は、カレン人2個中隊、カチン人1個中隊、チン人1個隊が標準であった。¹⁰⁰⁾

1934年、ビルマがインドから分離することが決定された後、ビルマ駐屯のインド人軍隊とMilitary Policeは、ともに総督を司令官とする「ビルマ国防軍」(Burma Defence Force)に改編された。¹⁰¹⁾そして1937年、インドからのビルマ分離に伴いビルマ・ライフル銃隊はインド軍第20連隊からはずされ、4個大隊にふやされた。¹⁰²⁾インドからの分離以前ビルマに駐屯していた軍隊は、次のとおり¹⁰³⁾であった。

英軍歩兵2個大隊

インド歩兵3個大隊

91) Furnivall (1956), p. 178.

92) *Ibid.*, p. 178.

93) *Ibid.*, p. 178; しかし、英領化直後にはシャン人、カレン人、カチン人同様、ビルマ人もまたMilitary Policeの重要な構成要素と考えられていた。Charles Crosthwaite, pp.16, 21.

94) Harvey (1946), p. 42, D. G. E. Hall (1956), p. 167; この時参戦したのは「武装警察」4,650名と、原住民兵士8,000名であった。Cady (1958), p. 185.

95) Furnivall (1956), p. 182.

96) Tinker (1956), p. 314; D. G. E. Hall (1956), p. 167.

97) Furnivall (1956), p. 182; Tinker, p. 314.

98) Harvey (1946), p. 42; フーカーは、こうした措置を「一大政治的失策」とよんでいる。ビルマ人は、第二次大戦が始まってとうとう「祖国の防衛には参加しなかった」のである。Foucar (1956), p. 105.

99) Furnivall (1956), p. 182.

100) Tinker, p. 314.

101) Furnivall (1956), p. 183.

102) Tinker, p. 315.

103) D. G. E. Hall (1956), p. 167; Furnivall (1956), p. 178; このうち、Military Policeは9個大隊が正確。インド歩兵3個大隊の存在は疑わしい。

ビルマ・ライフル銃1個連隊（ビルマ人を含まない。4個大隊から成る）

工兵1個中隊

Military Police 10個大隊

これらの軍隊は、国内の治安警備上、主としてラングーンとメイミョウ地区に配備されていた。¹⁰⁴⁾ Military Police は、インドから分離後、2組に再編された。中部に3個大隊（第1、第2大隊はラングーン、第3大隊はマンダレー）が配備され、6個大隊は国境警備隊として北シャン州、南シャン州、チン丘陵、ミッチーナー、バモーなどに配置された。¹⁰⁵⁾

1939年、ビルマの防衛力は、正規軍5,000名、国境警備隊と Military Police 12,000名であった。正規軍6個大隊の内、ビルマ・ライフル銃1個大隊、英歩兵1個大隊はミンガラドンに、ビルマ・ライフル銃1個大隊がマンダレーに、そして残りの英歩兵1個大隊とビルマ・ライフル銃2個大隊はメイミョウに配置されていた。¹⁰⁶⁾

1939年のドイツの宣戦布告と共に、ビルマ軍の増強が進められた。ビルマ・ライフル銃隊も新たに第5、第6大隊が追加編成された。第7大隊はグルカとインド人の Military Police から、第8大隊はシクとパンジャブ回教徒の国境警備隊から転用され、第9大隊は予備部隊、第10大隊は訓練部隊として設置された。¹⁰⁷⁾

1939年から41年にかけて、さらに4個大隊が追加編成された。第11、第12大隊はビルマ人とカレン人で、第13、第14大隊はすべてシャン人で構成されていた。¹⁰⁸⁾

1941年1月、空軍司令部（ステューブソン司令官）がラングーンに設置され、ミンガラドン空港に飛行2中隊（戦闘機30機）が配置された。¹⁰⁹⁾ 海軍はビルマ付近の水域に発動艇5隻から成る英海軍予備隊があるだけだった。¹¹⁰⁾

ビルマ・ライフル銃大隊は、1941年7月「第1ビルマ師団」（ブルース・スコット少将）に編入された。¹¹¹⁾ 第1ビルマ師団は、第1ビルマ旅団（ハーウェル準将）、第2ビルマ旅団（ブールク準将）、第13インド歩兵旅団の3個旅団から成り立っていたが、その兵力は標準英師団の半数ちょっとにすぎなかった。¹¹²⁾ 第1ビルマ旅団はキングズ・オウン・ヨークシャー軽歩兵隊と第1、第5ビルマ・ライフル銃大隊、第2ビルマ旅団は第2、第4、第6、第8ビルマ・ライフル銃大隊で構成されていた。¹¹³⁾

104) 『ビルマ進攻作戦』 p. 11.

105) Tinker, pp. 315-6.

106) *Ibid.*, p. 316.

107) *Ibid.*, p. 316.

108) *Ibid.*, p. 316.

109) Maurice Collis, *Last and First*, pp. 55, 62.

110) 『ビルマ進攻作戦』 p. 11.

111) Tinker, p. 317.

112) 英軍1個師団の兵力は1万5千だが、ビルマ師団は8千にすぎなかった。U Hla, p. 94; Thakin Lwin, p. 62.

113) Tinker, p. 317; 『ビルマ攻略作戦』 pp. 18-19.

ビルマ軍司令部（ケネス・マクレオド中将，後トーマス・ハットン中将）ラングーン在
第1ビルマ師団（スコット少将）タウンゲー県在

第1ビルマ旅団（ハーウェル准将）南シャン州駐屯

（キングズ・OWN・ヨークシャー軽歩兵隊
第1ビルマ・ライフル銃大隊
第5ビルマ・ライフル銃大隊

第2ビルマ旅団（ブールク准将）テナセリム駐屯

（第2ビルマ・ライフル銃大隊
第4ビルマ・ライフル銃大隊
第6ビルマ・ライフル銃大隊
第8ビルマ・ライフル銃大隊

第13インド歩兵旅団（カーティス准将）シャン州駐屯

第16インド歩兵旅団（ジョーンズ准将）マンダレー，後コーカレイ駐屯

開戦後，インドから新たに第17インド師団（スミス少将；第46，第48インド旅団から成る）がビルマに配転された。¹¹⁴⁾

日本の大本営は，太平洋戦争開戦直前のビルマの兵力をビルマ土民兵2万6千，インド兵8千，英兵2千6百，中国兵2千，計3万8千6百と判断していた。¹¹⁵⁾

日本軍がビルマ全土を制圧した1942年5月，テナセリムで日本軍を迎撃した第17インド師団（デービッド・カウワン准将，スミス少将の後任）はカレーワに撤退，ハロルド・アレクサンダー將軍（ハットン中将の後任）が率いるビルマ軍も，スティルウェル將軍配下の米，英，緬，中混成軍もインド国境を越えた。¹¹⁶⁾ 撤退が終わる頃，第1ビルマ師団の兵士には帰郷命令が出され，日本占領に対する抵抗運動への参加が言い渡された。¹¹⁷⁾ それは，ミャウンミャを中心にデルタ地帯で発生した「カレン・ビルマ衝突事件」¹¹⁸⁾への不幸な伏線にほかならなかった。

1942年夏，連合国軍の東部戦線における戦闘配置状況は，次のとおり¹¹⁹⁾であった。

インド軍（司令官アーチボルド・ウェーベル大将）

（第4軍団（アーウィン中将） アッサム防衛
第15軍団（ピアース中将） ベンガル防衛
第70英師団 オリッサ海岸

114) M. Collis, p. 75.; Tinker, p. 317.

115) 『ビルマ攻略作戦』p. 17; この中には第17インド師団および国府第5，第6軍が含まれているかどうか不明。M. Collis, p. 47; Foucar(1956), pp. 118-29; Trevor Dupuy, p. 5; Hall(1956), pp. 168-9.

116) Bisheshwar Prasad, p. 14; Trevor Dupuy, p. 6; D. G. E. Hall (1956), p. 169; M. Collis, p. 141, chapt. XVIII.

117) Prasad, p. 14.

118) 大野徹「カレン民族の独立闘争史(その1)」p. 370.

119) Prasad, p. 15.

ビルマ軍(第17インド師団および第1ビルマ師団)は、第4軍団に編入された。けれども第1ビルマ師団は、実際には無に等しかった。¹²⁰⁾ 第1ビルマ・ライフル銃大隊のカレン人2個中隊は、サルウィン地区のカレン応援に派遣されていた¹²¹⁾ し、わずかに残っていた第2ビルマ・ライフル銃大隊(兵力4~500)も、後オード・ウィングート将軍の Chindit¹²²⁾ に編入されてしまった。以上のほか、連合軍には予備軍とルジャイ、チン、ナガなどの山地民による“V”フォースがあった。彼らの任務は、情報収集と日本軍の通信の妨害¹²³⁾であった。

翌43年8月、ルイス・マウントバッテン中将(海軍)が東南アジア方面軍司令官に、ジョセフ・スティルウェル中将が副司令官に任命されて¹²⁴⁾、東南アジアにおける米英共同作戦が開始され、戦闘配置状況は次のように¹²⁵⁾変わった。

第14軍	司令官	ウィリアム・スリム大将	ビルマ全土の作戦
第15軍	司令官	アレクサンダー・クリスティソン中将	アラカン戦線
第4軍	司令官	ジョフレイ・スクーンズ中将	中部戦線
北部地域軍(3個師団)		ジョセフ・スティルウェル中将	北部戦線
特別軍(6個旅団)		オード・ウィングート少将	北部戦線増援
第33軍(4個師団)		モンテューグ・ストップフォード中将	予備, 後ディマプール戦線

第2次大戦開戦と同時に、ラングーンでは原住民部隊の増募がやかましく言われ出した。¹²⁶⁾ 「住民は、もはやビルマ予備軍(Burma Auxiliary Force)から除外されない」という布告が1939年8月31日出された¹²⁷⁾が、日本軍がビルマに進撃して来た時、ビルマ人たちは英国の言う「国防」の任にはとうとう参加しなかった。彼らは「ビルマ独立軍」(BIA)という新しい衣をまとして、日本軍とあいたずさえてビルマに帰って来たのである。しかも彼らの銃口は、日本軍に対してではなく英軍に向けられていた。

Ⅲ ビルマ独立軍の系譜

(1) 政治的背景

1886年1月1日インドの1州として英領化されたビルマだが、英国の植民地行政に対する政

120) *Ibid.*, p. 15.

121) Tinker, p. 318.

122) ウィングート準将配下の Chindit(3千名)の活動については, Matthews, chapt. VI; Trevor Dupuy, p. 8; J. H. Denny, *Chindit Indiscretion*; Bernard Fergusson, *Beyond the Chindwin* などに詳しい。

123) Rrasad, p. 15; Matthews, p. 88. この「第5列」が日本軍の宣伝班を悩ませたR号謀者であったかどうか明らかでない。R号謀者については鈴木正七「見えざる戦い」『秘録大東亜戦史ビルマ篇』pp.382-422. に描かれている。

124) Geoffrey Matthews, p. 8; D. G. E. Hall (1956), p. 170

125) *Ibid.*, pp. 10-11.

126) Maung Maung, *Burma in the Family of Nations*, p. 92.

127) Furnivall (1956), p. 184.

治運動は第一次大戦終了までは顕在化しなかった。¹²⁸⁾だが、モンテーギュ・チェルムスフォード改革案のビルマ適用によって1923年に出現した「両頭政治」制度¹²⁹⁾、1937年のインドからの分離¹³⁰⁾、ビルマ統治法に基づく二院制の実施といった政治形態の変遷と、植民地行政維持に伴うビルマ人の貧困化を背景にナショナリズムが高揚する。それは、ウー・オウタマ、ウー・ウィザヤ、サヤー・サンなど僧侶政治家（ナインガンイエー・ボンヂー）による個人的覚醒運動と、YMBA, GCBA, ドウバマー・アシーアヨンといった政治結社による団体活動の両面を通して、1920年以降急速に高まっていった。¹³¹⁾

YMBA（ビルマ青年仏教徒会）は、ウー・メーオン、ウー・キン、ウー・バペー、サー・マウンヂなどによって1906年に結成された団体である。¹³²⁾だがこの団体は、もともとYMCAをモデルに作られたもので¹³³⁾、仏教の興隆、教育の振興、ビルマ文化の保存を図る社会的組織であって¹³⁴⁾、政治団体からはほど遠い存在¹³⁵⁾であった。

GCBA（ビルマ人協会総評議会）は1920年にYMBAの中央評議会から転身した組織で¹³⁶⁾、初代委員長にはウー・チップライン、副委員長にはウー・バペーが選出されていた。¹³⁷⁾GCBAはYMBAとは異なり「仏教徒」であるよりも「ビルマ人」であることに重点をおく組織で¹³⁸⁾、当然政治的色彩も濃厚であった。¹³⁹⁾だがこのGCBAの活動は、ビルマ政庁に対する非協力といった消極的方針¹⁴⁰⁾を続けることによって、両頭政治が導入された時分裂してしまう。¹⁴¹⁾GCBAはインドからのビルマ分離に際しても、ウー・バペーらの分離派とウー・チップライン、バモーらの非分離派とに分かれた。¹⁴²⁾

こうした組織とは別に、1920年代には新しい政治活動家が現われた。それは、強烈な民族主義的意識をもつ一群の僧侶達であった。中でも若い熱心な支持者を多数もつウー・オウタマ¹⁴³⁾は、ガンジーの非協力運動の影響を受け¹⁴⁴⁾、植民地行政を激しく非難した。¹⁴⁵⁾オウタマ僧正

128) Cady (1958), p. 191; Htin Aung, p. 100; Trager, p. 46; Thakin Nu, *Introduction*, p. XVII.

129) Harvey, *British Rule*, p. 78; Mg Mg, *Family of Nations*, p. 85; Desai, p. 254.

130) Mg Mg, p. 86; Htin Aung, p. 108.

131) Cady (1958), p. 213.

132) Mg Mg, *Constitution*, p. 7; Cady (1958), p. 179; Trager, p. 44; U Ba U, p. 63.

133) Htin Aung (1965), p. 101; Desai, p. 255.

134) Mg Mg, p. 7; Htin Aung (1965), p. 102.

135) Cady (1958), p. 180. 会員達は宗教問題以外については話し合いをしなかった。U Ba U, p. 63.

136) Cady (1958), pp. 193, 218; Mg Mg, pp. 14-15; Thakin Nu, *Introduction*, p. XVII.

137) Mg Mg, p. 15. ウー・バペーは反逆罪の容疑で1954年12月4日逮捕投獄された。Bamakhit 1954. 12. 5.

138) Htin Aung (1965) p. 104.

139) Mg Mg, p. 15. ウー・バペーは、GCBAを「政党」とよんでいる。U Ba U, p. 63.

140) 矢野暢, p. 317.

141) Htin Aung (1965), p. 104; Trager, p. 49.

142) Trager, p. 50; Htin Aung (1965), p. 107.

143) Cady (1958), p. 231.

144) Smith, p. 95.

145) U Ba U, p. 78.

はしばしば逮捕投獄されたあげく、1939年に死んだ¹⁴⁶⁾が、ビルマの民族主義に与えたその影響は実に大きなものがあった。¹⁴⁷⁾

ウー・ウィザヤは、ウー・オウタマに次ぐ「僧侶政治家」である。ウィザヤ僧正は地租税に反対して投獄され¹⁴⁸⁾、出獄するや反政府的言動の科でまたもや逮捕、166日間にわたる断食を敢行して1929年獄死した。¹⁴⁹⁾

1930年12月22日、ターヤーワディー地方を中心に発生した「農民一揆」¹⁵⁰⁾は、こうした僧侶政治家運動の頂点であった。¹⁵¹⁾この一揆を指導したのがサヤー・サンである。¹⁵²⁾叛徒達は手製の小銃数丁と刀剣を除いて武器らしい武器すら持っていなかった¹⁵³⁾が、反乱は1932年4月に鎮圧¹⁵⁴⁾されるまで続いた。この「ターヤーワディー反乱」によって1万人が殺され、9千人が投獄、128人が処刑された。¹⁵⁵⁾指導者のサヤー・サンは1931年8月2日逮捕され¹⁵⁶⁾、同年11月16日絞首刑に処された。¹⁵⁷⁾

ビルマの民族主義運動は、若いラディカルな愛国者たちが結成した「ドウバマー・アシーアヨン」によって開花する。この組織は「全ビルマ青年連盟」¹⁵⁸⁾と「ドウバマー協会」との合併によって¹⁵⁹⁾1930年頃に結成された。¹⁶⁰⁾この組織は、もともとウンターヌ運動から派生した¹⁶¹⁾もので、発足当初は委員長、副委員長、書記長、会計といった役員もおいてなければ、会費の徴収も行なっていなかった。¹⁶²⁾その運動も、タキン・パタウン、タキン・フラボー、タキン・ティンマウンなど11名の指導者によって運営されるだけの小さな組織にすぎなかった。¹⁶³⁾

146) U Ba Yin, p. 86; 萩原 (1965), p. 66.

147) Smith, pp. 98-99.

148) Cady (1958), p. 261.

149) 国分正三『大緬甸誌』下巻, pp. 169-170; M. Collis, *Into Hidden Burma*, p. 172; Cady p. 261.

150) Htin Aung (1965), p. 106; Mg Mg, p. 22; Han Tin, pp. 352-363.; She thoe 1965. 3. 1. p. 20.

151) Smith, p. 107. もっとも、その背景に1929年の世界大恐慌があることは見逃せない。

152) Cady (1958), p. 309. ハーベイは、これを「民族主義運動」ではないと言っている。Harvey, *British Rule*, p. 74.

153) M. Collis, *Trials in Burma*, p. 216; She thoe 1965. 3. 1. p. 21.

154) 政府は鎮圧に2個師団を投入した。U Ba U, p. 105.

155) Htin Aung (1965), p. 106; Htin Aung (1967), p. 292.

156) Thakin Nu, *Introduction*, p. XIX; Han Tin, p. 444; U Ba U, p. 110.

157) Mg Mg, p. 25; Ba Maw, p. 428. キャディーは、1937年11月28日としている。Cady (1958), p. 317.

158) 結成当初の役員は、コウ・ティン (委員長), コウ・カン (副委員長), コウ・ティーハン (会計), タキン・レーマウン, タキン・パセイ, タキン・フラボー, タキン・フラマウン, タキン・トゥンティン。Han Tin, p. 390.

159) Cady (1958), p. 375; Tinker, p. 7.

160) 結成の時期は明確ではないが, *Doe Bama Asiayon Thamain* Vol. I, pp. 44-50. によれば, ほぼ30年頃から活動が開始されている。

161) *Doe Bama Asiayon Thamain*, p. 44.

162) *Ibid.*, p. 51.

163) *Ibid.*, p. 51. 執行委員としては、当初次の7名が明らかである。タキン・パタウン (委員長), タキン・ティンマウン (書記長), タキン・パティン, タキン・トゥンシュエ, タキン・ハン, タキン・フラボー, タキン・ティンハン。Sagain Han Tin, Vol. III, p. 332.

「ドウバマー・アシーアヨン」が、「タキン党」ともよばれるのは、会員達が自らの名称に「主人」を意味するビルマ語「タキン」を用いて表示したことによる。タキン達は強烈な民族主義者ではあったが、そのイデオロギーは雑多であった。タキン・ソウ、タキン・タントゥン、タキン・テインペーなどははっきりした共産主義者であったが、ドウバマー・アシーアヨンそれ自体は、「共産主義団体」というよりはむしろ「民族主義団体」¹⁶⁴⁾であった。この組織は、タキン・アウンサン、タキン・ヌ、タキン・バスエー、タキン・チャーニェインなど1936年の大学ストを指導した元ラングーン大学学生自治会の執行委員たち、およびタキン・タントゥンなどを迎え入れてから体質を強加する。¹⁶⁵⁾ 彼らの行動は国粋主義的であり¹⁶⁶⁾、その目標は早期かつ無条件のビルマ独立であった。¹⁶⁷⁾

ビルマ統治法に基づく第1回の選挙によって1937年3月はじめて登場したバモー内閣¹⁶⁸⁾は、反インド暴動¹⁶⁹⁾、イエーナンチャウン油田労働者のデモ¹⁷⁰⁾、マンダレーにおける1939年のデモ¹⁷¹⁾といった一連の試練を受けて倒れ、1939年2月ウー・ブ内閣が登場¹⁷²⁾する。そして、翌40年9月、ウー・ソーが第3代首相に就任した。¹⁷³⁾ところが、欧州における第二次大戦の勃発は、ビルマ人の意志とは無関係に、ビルマを戦争に引きずりこんだ。¹⁷⁴⁾ 1941年9月ウー・ソーはロンドンにとんだ。彼の念願は、戦争終了後におけるビルマの「完全自治」の要求であった。だが、英、米をかけ回ったウー・ソーは、とうとうビルマへは戻って来なかった。英国政府に逮捕されてウガンダに幽閉された¹⁷⁵⁾のである。

第二次大戦開戦と共に、ビルマの民族主義にもタキン達の考えにも、大きな変化が訪れる。ドウバマー・アシーアヨンは、バモー博士の「シンイエーダー党」およびラングーン大学学生自治会組織と合体して「自由ブロック」（ビルマ語名トゥエヤッ・ガイン）を形成した。¹⁷⁶⁾ 自由ブロックのスローガンは、(1)ビルマ独立権の承認、(2)制憲議会召集の準備、(3)総督保有権限の内閣への移譲であった。¹⁷⁷⁾ 彼らは、戦争が終わった時英国がもしビルマ独立を保証するのであれば英国に協力しよう。さもなくば英国と闘う¹⁷⁸⁾と主張した。けれども、この自由ブロッ

164) Cady (1958), pp. 377-8. バモーによれば、発足当初は純粋に「種族的」であった。Ba Maw, p. 55.

165) Htin Aung (1965), p. 110; Soe Maung, *Prime Minister*, p. 110.

166) Foucar, *I lived in Burma*, p. 82.

167) Butwell, p. 28.

168) Foucar, p. 83; Cady (1958), p. 389; Desai, p. 258.

169) M. Collis, *Into Hidden Burma*, p. 183; Cady (1958), pp. 393-5.

170) Maung Thit Lwin (1967)

171) U Mg Mg Tin, "Ma lutlat mi tandu," *Loktha Pyidu Nezin*, 1968. 2. 21.

172) Cady (1958), p. 402; Mg Mg, p. 42; Trager, p. 53.

173) Foucar, p. 104; Cady (1958), pp. 420-1; Mg Mg, p. 44; Desai, p. 259.

174) Ba Maw, p. 35; Mg Mg, p. 44.

175) Mg Mg, p. 46; Desai, p. 259; Ba Maw, p. 52.

176) Ba Maw, pp. 40, 58. 結成の時期は1939年10月であった、とバモーは述べているが、ボウ・トゥンフラでは1940年となっている。Bo Tun Hla, p. 35; 大野徹訳『アウンサン将軍 (II)』p. 43.

177) Cady (1958), p. 416; Desai, p. 259.

178) Butwell, p. 33.

ク内のタキン達は、かならずしも同一志向性をもっていたわけではない。英国の統治を終わらせるためには日本の協力が必要だと考えるバモーやタキン・バセインらに対して、タキン・ヌ、タキン・アウンサンらは中国への日本の侵略に批判的であった。¹⁷⁹⁾ タキン・ソウなどは、日本との提携に真向から反対していた。¹⁸⁰⁾

若いタキン達の集まり「ビルマ革命党」は、友好的外国からの援助と武器入手の必要性を感じはじめていた。¹⁸¹⁾ ビルマ革命党は1939年結成された¹⁸²⁾もので、その幹部はタキン・ミャ、タキン・チッ、タキン・チョーニェイン、タキン・バスエーなどであった。¹⁸³⁾

ドウバマー・アシーアヨンは、1939年の大会で対英非協力¹⁸⁴⁾、武装蜂起を決議した。¹⁸⁵⁾ マウンソマウン、アウンヂーなどの学生達は、軍事訓練の準備にとりかかった。¹⁸⁶⁾ そして1940年、ビルマ防衛法に基づくタキン達の逮捕が始まった。テインマウン博士、タキン・ヌ、タキン・バヘイン、タキン・ソウ、タキン・バスエー、タキン・バセインらが逮捕投獄された。¹⁸⁷⁾ バモー博士は動乱教唆罪で1940年8月逮捕された。¹⁸⁸⁾ 1940年6月ヒンダータ県警部長から5チャットの懸賞金がかけられたタキン・アウンサン¹⁸⁹⁾は、地下に潜った。アウンサンは、シリアム石油労働組合の指導者¹⁹⁰⁾ タキン・フラミヤイン（ボウ・ヤンアウン）と共に苦力に変装、8月8日チャイナ・サイアム・ラインの貸客船「海利号」で国外に脱出した。¹⁹¹⁾ アウンサンらの目的は、中国の八路軍と連絡をとることであった。¹⁹²⁾

(2) 南機関の結成と「三十人の志士」

当時、日本の参謀本部で船舶課長をしていた鈴木敬司陸軍大佐は、南方問題の調査研究を命ぜられ、上海の特務機関にいた樋口猛、杉井満、満鉄調査部にいた水谷伊那雄などの参加を得て、対ビルマ謀略を開始した。¹⁹³⁾

鈴木大佐は日緬協会書記「南益世」と変名、樋口は塩水港製糖会社の嘱託として、1940年バ

179) Cady (1958), p. 418; Ba Maw, p. 116.

180) Bo Thein Swe, p. 142.

181) Mg Mg, p. 47; Butwell, p. 32.

182) Tinker, p. 7.

183) Butwell, p. 30.

184) 「われわれ全ビルマ国民は、英帝国主義資本家政府に対し、人的、資金的、精神的協力、援助支持を行なわない旨、全員一致で決議」Yebaw Hlamyo, p. 131.

185) Bo Thein Swe, p. 141.

186) Mg Mg, p. 48.

187) Trager, p. 52; Butwell, p. 29; Ba Maw, p. 91; U Hla, p. 78.

188) Foucar (1956), p. 105; Ba Maw, p. 97.

189) U Hla, Vol. I, p. 78; Bo Tun Hla, p. 37; 大野徹訳『アウンサン将軍(II)』p. 44. 1939年にも一度逮捕されている。H. G. Trager, p. 170.

190) 大野徹「ビルマ共産党の現状」p. 159.

191) Cady (1958), p. 428; Mg Mg, p. 49; Ba Maw, p. 103.

192) Mg Mg, p. 49: 逮捕状を逃れてアモイに脱出したアウンサンには、はっきりした見通しはなかったと述べている人もある。Htin Aung (1967), p. 298.

193) 『南機関外史』pp. 2-4. 実際の活動は、1940年3月から開始された。『ビルマ攻略作戦』p. 9.

ンコク經由ラングーンに向かった。¹⁹⁴⁾ 当時海軍側は、ビルマ在留の邦人旗中氏、国分正三氏の線を通じてアウンタンからビルマ情報を入手していた。¹⁹⁵⁾

ラングーンに着いた鈴木大佐は、テインマウン博士を通じてアウンサン、フラミヤインの写真入手、台湾軍の田中参謀を通じて2人の収容を依頼した。8月24日アモイに着いた¹⁹⁶⁾ アウンサン、フラミヤインの両名は、神田憲兵少佐に発見され台湾、福岡を經由して飛行機で羽田におくられた。¹⁹⁷⁾ 11月12日羽田に着いた¹⁹⁸⁾ 2人を、先に帰国していた鈴木、杉井の両名が出迎えた。

早くからビルマ謀略の重要性を認識していたのは海軍であったが、ビルマ人2人の出現によって参謀本部は、新たに本格的な対ビルマ謀略にのり出すことを決めた。陸軍側は、その準備要員として加久保尚身、川島威伸兩大尉、山本政義中尉の3名¹⁹⁹⁾を鈴木大佐の下に配属させた。ビルマ滞在中の1940年8月、英官憲に逮捕され国外追放に付されていた国分正三²⁰⁰⁾が41年1月10日帰国、陸海軍の合同会議が1月16日はじめて開かれた。²⁰¹⁾ この時の出席者は次のとおりであった。

海軍側—小川大佐、堀内大佐、小野田中佐、松永中佐

陸軍側—臼井大佐、唐川大佐、武田中佐、村上中佐、尾関大尉

この結果立案されたビルマ謀略の基本的骨子は次のとおりであった。²⁰²⁾

ビルマ独立計画—鈴木大佐、川島大尉

 〃 補佐—山本中尉

兵器担当—加久保大尉

政治担当—杉井、樋口、水谷

謀略機関の名称はさしあたり「南方企業調査会」と称することに決定、1月30日次の人事が発令された。²⁰³⁾

陸軍大佐鈴木敬司—参謀本部付

陸軍大尉川島威伸—大本営陸軍部付

194) *Ibid.*, p. 4; 坪谷正吉『建国秘話』によると、鈴木大佐は読売新聞の特派員として入国した。『秘録大東亜戦史ビルマ篇』p. 303; Ba Maw, pp. 110-112.

195) *Ibid.*, p. 5. 国分は予備役の海軍大尉で、ラングーンで歯科医を開いていた。タキン・バセインらと交わり、海軍省の山本五十六、井上成美、岡敬純などにビルマ情報を提供していた。太田常蔵『史海』第11号, pp. 2-3; Ba Maw, p. 108.

196) 大野 徹訳『アウンサン将軍 (II)』p. 45.

197) 『南機関外史』p. 6; Ba Maw, p. 125.

198) Mg Mg, p. 49; Bo Tun Hla, p. 41; 大野徹訳『アウンサン将軍 (II)』p. 46.

199) いずれも中野学校出身の将校。泉谷達郎, p. 35.

200) 国分正三, 下巻, pp. 162-3; Ba Maw, p. 109; U Hla, p. 78.

201) 『南機関外史』p. 7; 太田常蔵『軍政史』p. 44.

202) *Ibid.*, p. 8.

203) *Ibid.*, p. 8.

陸軍大尉加久保尚身—台湾軍司令部付

陸軍中尉野田毅—大本營陸軍部付

陸軍中尉高橋八郎—大本營陸軍部付

海軍側（発令月日不明）

児島大佐，日高中佐，永山少佐

昭和16年（1941）2月1日午後1時，陸海軍将校全員が参謀本部に集合，ここにビルマの独立援助を目的とする「南機関」が，大本營直属の機関として正式に発足した。²⁰⁴⁾

南機関が決定したビルマ謀略の作戦第1号は，独立運動の指導者を日本に亡命させること²⁰⁵⁾であった。1941年2月15日，杉井満，アウンサン（日本名「面田紋次」）の両名は，偽造の船員手帖をもち船員服に身を包んで，ビルマ米買付けの大同海運「春天丸」に乗りこみ川崎からビルマに向かった。²⁰⁶⁾

この時ビルマから脱出したビルマ青年は，タキン・フラペー（ボウ・レッヤー），コウ・トゥンシェイン（ボウ・ヤンナイン），コウ・エーマウン（ボウ・モウ），タキン・パヂャン（ボウ・ラヤウン）の4名である²⁰⁷⁾が，この時の脱出の模様を南機関の杉井満，高橋八郎大尉の両名が昭和19年5月に編纂した『南機関外史』は，次のように²⁰⁸⁾伝えている。

『本船「パセイン」到着ト共ニ二名ノ水夫ヲ斥候ニ出シ各税関ノ門ヲ調査セシメタル所，正門ニ警官ナキヲ知り直ニ杉井，機関長(船)，「オンサン」他二名ノ船員ト共ニ船員服ヲ着テ「バナナ」買ヒニ偽シ正門ヲ脱出，約四百米前方ノ林ニ這入り予メ用意シ杉井ノ腹巻トセル「ロンジー」ヲ取出シ「オンサン」ヲ緬甸人ニ変装セシメ，「オンサン」ハ偽歯ト留比トラ握リ間道ヲ利用シ「パセイン」ノ町ニ潜入，「ヘンザダ」ヲ経テ汽車ニ依リ「ラングーン」ニ潜入セリ。²⁰⁹⁾ 変装迄ノ時間約三十分ヲ要セリ。(中略) 機関長ハ「オンサン」ノ脱乗テタル船員服ヲ二重ニ着込ミ，一行ト共ニ附近ノ「バゴダ」ニ参リ，間道ニ添ヒ税関裏門ヨリ本船ニ帰還セリ。(中略) 英官憲ノ人員点呼アリタルモ，予メ入港当時総ベテノ申告書類ハ一名ヲ減ジテ作製セラレアリシタメ，無事通過セリ。本船ハ次デ「ラングーン」ニ廻航セリ。(中略) 翌日二十三時三〇分ヨリ二十四時三〇分ニ互ル一時間ヲ脱出決行ノ時間ト打合せ，杉井ハ上甲板ニアリー等運転手船首，船長ハ船尾，ソレニ各々部下ヲ付ケ戦闘配備完了シアリタルモ，予メ打合セタル艇舟伝ヒノ侵入路ヨソハ定刻迄ニ出現セズ。後デ判明セル所ニ依レバ，当時船中ニアリシ警官四名ノ為メ予定路ノ情況許サズ，「オンサン」一行ハ一時船尾ノ繫留浮標ノ上ニ退避シ，ソコヨリ鎖ヲ繋がり多少ノ擦過傷ヲ負ヒタルモ一同無事。(中略) 決死的潜入ヲ為シタリ』。

204) *Ibid*, pp. 8-9.

205) 大野 徹訳『アウンサン将軍 (II)』p. 6.

206) 『南機関外史』p. 12; 泉谷, pp. 39-40; Mg Mg, p. 50; アウンサンがラングーンに帰着したのは3月3日であった。Bo Tun Hla, p. 42.

207) 『南機関外史』p. 15; Bo Min Gaung, p. 45; Ba Maw, p. 130.

208) 『南機関外史』pp. 14-15.

209) ラングーンに戻ったアウンサンは，タキン・パスエー，タキン・チャーニエインらと共に，志士29人の人選を行なった。Htin Aung (1967), p. 299. 相談相手には，パスエー，チャーニエインのほか、タキン・ミヤ，タキン・チツ，コウ・フラマウンなどがいる。Bo Thein Swe, p. 144.

こうして脱出第1期組は1941年3月23日、東京に帰着した。²¹⁰⁾

「南機関」ではその後も、木俣豊次とフラミヤイン（日本名「糸田貞一」）に対する作戦命令第2号、水谷伊那雄に対する作戦命令第3号を発して、独立党員の脱出収容を続けた。²¹¹⁾

第2陣として水谷氏の手引きで日本の米積込船「カイショウ丸」で脱出したのは、タキン・ソールイン（ボウ・ミンガウン）、タキン・タンティン（ボウ・ミャディン）、コウ・シュエ（ボウ・チャーゾー）、コウ・トゥンシュエ（ボウ・リンヨン）、コウ・ソウ（ボウ・ミインアウン）、コウ・アウンティン（ボウ・イエートゥッ）、コウ・ティンエー（ボウ・ボンミイン）の7名でビルマを4月13日出航、4月28日大阪に着いた。²¹²⁾

第2陣の脱出模様について、その一人ボウ・ミンガウンは次のように語っている。²¹³⁾

『1941年4月10日のことであった。（中略）私（ボウ・ミンガウン）は、その前の日から人を待っていた。4月9日は何事もなく暮れていった。待ち人は現われなかった。私が待ち人に会ったのは4月10日午後1時半、チョピンガウ町の停車場であった。その人は、亡くなった指導者タキン・ミャ（訳注：1947年7月19日暗殺された）が巡遣したナッター出身のタキン・タンであった。

タキン・ミャの手紙とラングーン行きの汽車の切符を渡ししながら、タキン・タンは、“タキン・ソールイン、今夜の汽車で来るようにとのことだ。僕は、下りの列車で直ぐたつがね”と言いながら、あたりの人影を見てすぐに黙り込んでしまった。（中略）祖国と同朋のために任務を果たさねばならない。両親や祖国に別れを告げる時が来たのだ。（中略）

1941年4月11日のことだった。（中略）午後7時半、フレーダン通り93番地にあるタキン・ミャの家に向かった。タキン・ミャは私を見ると喜んで、“よく来た。まあ坐りたまえ”と言って、“はたして君が来るかどうか気をもんでいたところだ。やっと用意万端ととのったぞ……（中略）

君を呼んだのは外でもない。今、タキン・アウンサンが日本に行ってる。君は、タキン・アウンサンの所へ行って軍事訓練を受けるんだ”と言っているところへボウ・ミインアウン（コウ・ソウ）が部屋から出て来た。

タキン・ミャは、コウ・ソウと私を紹介した後、私達二人をタキン・チッの住む49番街の協同組合店へ送り出した。（中略）

タキン・チッは私達の顔を見るや否や、“どうだね、君達。今夜、日本の米積み込み船「カイショウ丸」で日本へ密入国するんだ。用意はできてるな……（中略）じゃ、今から船員に変装するための白上衣と白ズボンを買に行こう”私達三人はスコット・マーケットに行った。そして、ある店で船員に変装するための長そでの白い上衣と白い長ズボン、白靴を買ってもらい、再びタキン・チッの家へ戻った。

休憩している時、タキン・チッが、今夜八時半に寄港する米積み船「カイショウ丸」に乗り込んでいる日本側の連絡員が、私達二人を出迎えに来ると説明した後、合い言葉を教えてくれた。（中略）

210) 『南機関外史』 p. 15; Bo Min Gaung, p. 45; ボウ・トゥンフラは3月27日と述べている。Bo Tun Hla, p. 42. ボウ・ティンスエーも同様。Bo Thein Swe, p. 144.

211) 『南機関外史』 pp. 12-13.

212) Bo Min Gaung, p. 46.

213) Bo Min Gaung, pp. 22-29.

午後7時半であった。白シャツ、白ズボン、白靴を身につけた私達は、バー通り、フレーザー通りの方へと出た。（中略）そして、スーレー・パゴダ通りの角へと歩いて行った。あと5分で8時半だ。その時、スーレー・パゴダ通りの市庁舎の方からゆっくりと走って来る一台の馬車が目にとまった。（中略）車は、私達の傍を二ヤードばかり行き過ぎてから停った。客席からはマッチをする音がして火がついたかと思うとすぐに消えた。私は、ボウ・ミインアウンの手にふれて、小声で「間違うといけない。暫く様子を見るんだ」。再び火が点いたかと思うと、また消えた。見ていると、三度火がついた。そして、タバコをふかしている顔が浮かんだ。

私達は馬車の方へ向かって歩きながら、手にもっているバナナの房を三度前後にふって合図し、1パーロンばかり先に歩いて行ってそこでバナナを食べた。停っていた馬車も、私達の行く方へとついて来て、傍に停った。日本船の士官の服装をした人が、私達二人を頭からつま先まで見て、「ドウバマー、ドウバマー」と小声で言った。私達も「ドウバマー、ドウバマー」と答えたところ、ようやく馬車の扉が開いた。私達は、素早く車内に乗り込んだ。

車内に乗りこむと、その日本の士官は、私達に日本の船員がかぶる帽子をかぶらせた。馬車は、パンゾウダン岸壁の方に向かって走り出した。岸壁に着くと、20人か25人はいられる日本の船員達がやって来て、私達の馬車を取り囲んだ。日本の士官は、扉を開けると幾つかの品物を渡しみんなでそれを運びはじめた。私達二人も、日本船員の中にまぎれこんでついて行った。

岸壁には立哨中の警官がいた。警官の姿を見かけると、さすがに私達もギクリとした。岸边に停めてあったサンパンに、日本の船員達と一緒に緊張しながら乗り込み、沖に停泊している本船に向かって漕いで行った。（中略）好運にもようやく船上にたどり着いた。何処へ行ったらよいのか分からずボンヤリしていると、日本人船員が二人やって来て、私達の手をひき腰をかがめながら船腹の方へとゆっくり案内、とある部屋の中へ送り届けてくれた。

部屋の中には、薄暗いランプが灯してあった。部屋の中に人が三人いるのがボンヤリと見えた。その三人は、ターヤーワディー出身のコウ・タンティン（ボウ・ミャディン）、トンゼー出身のコウ・シュエ（ボウ・チョーゾー）、ミンフラ出身のコウ・ティンエー（ボウ・ボンミイン）であることが、部屋に入ってから分かった。（中略）

12日午後十時半ごろ、部屋の外に足音がして更に二人の同志が連れて来られた。その二人は、ラングーン出身のコウ・アウンティン（ボウ・イエートゥッ）とタウングー出身のコウ・トゥンシュエ（ボウ・リンヨン）であった。同志は、7人になった。』

脱出第3陣は、コウ・フラマウン（ボウ・ゼーヤ）、タキン・サンミャ（ボウ・タウティン）、マウン・キンマウンウー（ボウ・ターヤー）の3名で、杉井氏と共に「コウサイ丸」で日本に向かった。²¹⁴⁾

第4陣は、1941年7月8日「コリヨ丸」でビルマを出航、7月24日水谷氏と共に横須賀に到着した。一行は、次の11名であった。²¹⁵⁾

214) *Ibid.*, p. 46.

215) *Ibid.*, p. 48.

コウ・シューマウン（ボウ・ネーウィン）、タキン・サンフライン（ボウ・フムーアウン）、タキン・トゥンオウ、タキン・トゥンキン（ボウ・ミインスエー）、コウ・フラ（ボウ・ミンヤウン）、コウ・タンニェン（ボウ・ジンヨー）、タキン・チャーセイン（ボウ・モウニョウ）、コウ・マウンマウン（ボウ・ニャーナ）、タキン・グェー（ボウ・ソーアウン）、タキン・ティッ（ボウ・ソーナウン）、タキン・トゥンルイン（ボウ・バラ）。

第4陣組の一人であったボウ・ジンヨーは、脱出前後の様態を次のように²¹⁶⁾述べている。

『緬暦1303年（1941年）ワーズウ月上弦8日午後1時、ラングーン市49番街にあるトゥンシュエ先生（ナガーニー・ウー・トゥンシュエ）の家で昼食をしている時だった。トゥンシュエ先生から、君は今日、旅に出るんだ。すぐチッ先生の所へ行きたまえ、と言われた。チッ先生というのは、現在地下に潜っているビルマ共産党のタキン・チッのことである。当時、チッ先生は、イエーダョー協同組合の店の支配人をしていた。

店に行くとチッ先生は、鉛筆で走り書きした紙片を私に寄こし、スコット・マーケット（現在のボウジョウ市場）の大学協同組合の店に行くようにと言った。紙片には、この人に白ズボン、白シャツ、アンダーシャツ各二人分を渡してくれ。チッと署名してあった。（中略）私は、上衣、ズボンなどを受け取ると、午後三時ごろチッ先生の家へ帰って来た。先生はお金を1チャット取り出して、「黒靴を一足買っておけ」と言われた。（中略）それから理髪店に行き、髪を短く刈ってもらった。

ワーズウ月の上旬、雨季のはじめとあって降ったり止んだりの天候だった。チッ先生は、明りを小さく灯して安楽椅子に腰かけていた。傍に弟子のマウンフラ（ボウ・ミンヤウン）がいた。私達は、今まで一度も着たことのない白ズボン、白上衣を着、黒靴をはいた。言われたとおり二房のバナナをぶら下げて外に出、イエーダョー通りから線路沿いにニャウンゴン学校の方へと歩いて行った。そして、チャウタンとトムソン通りの交差点で人力車をひろった。傘は線路に投げ棄てた。モンゴメリー通り（現在のボウジョウ通り）沿いに夜市の近くまで来た時、人力車を乗り棄てた。（中略）約束の場所まで来る途中、インド人警官二人に出会った。どこかの国の船員とでも思ったのだろうか、私達は素知らぬ顔で歩いて行った。

8時45分、合同庁舎に面したダローギー通りのコウコー樹の下に、一台の馬車が停ってシューシューシューと警笛を三回鳴らした。私達は持っていたバナナの房を振って見せ、馬車に駆け寄った。車上にいた三人の人が、私達を馬車の上に引き上げてくれた。馬車はボウダタウンの方へ引き返し、旧岸壁に向かった。

岸壁には、日本人の船員が20人ばかり待っていた。私達は、馬車の中ですでに船員帽をかぶり船員用のコートを着ていた。ポケットには、偽造の船員手帳も入っていた。私達は、待ち構えていた船員達と一緒に、三隻のサンパンに分乗して船に向かった。船に着くと、案内して来た人が、下のエンジン・ルームに私達を連れて行った。タラップの所で立哨中の警官二人に出会ったが、別に何も言われなかった。船倉には、すでに二人の同志がいた。ワーズウ月上弦8日午後9時のことだった。』

1941年2月から6月にかけて「シンガポール水道」を往復すること8回²¹⁷⁾、南機関の手で日本へ密出国したビルマ青年の数は、アウンサン、フラミヤインの二人を合わせて27名に達したが、タイ国境を越えて陸路、日本側に連絡をとった者もあった。その内、タキン・アウンタ

216) Amyotha Thadinzin, 1957. 8. 3.

217) 『南機関外史』p. 14.

ン（ボウ・セッチャー）、コウ・タンティンの両名は国分正三の協力を得²¹⁸⁾、タキン・タンティンは高橋八郎中尉の手によって保護された²¹⁹⁾が、タンティンは国境でマラリアに冒され、台湾に着いた時病死した。²²⁰⁾以上の29名に、当時留学生として在中していたコウ・サウン（ボウ・ティンウィン）が加わって²²¹⁾、ここに「三十人の志士」が勢揃いしたのである。

1941年4月初旬、海南島南部の海軍基地「三亜」に特別訓練所（所長、福地海軍少佐）が開設され²²²⁾、「志士三十人」の猛訓練が開始された。訓練は3班に分かれて行なわれた。基礎訓練においては各班とも同じであったが、教育目的はそれぞれ異なっていた。すなわち、第1班は中隊以下の実兵の指揮、兵員の訓練ができる指揮官の養成、第2班はゲリラ、謀略破壊活動の指揮官養成、第3班は師団以下の運用のできる指揮官の養成であった。²²³⁾ 訓練所および訓練班の編成は、次のようになっていた。²²⁴⁾

海南島三亜訓練所

所長	福地海軍少佐		
教育部長	川島大尉		
第一班長	服部中尉	補佐	泉谷中尉
班員	ボウ・チョーゾー、ボウ・ボンミイン、ボウ・ジンヨー		
第二班長	原中尉	補佐	今村軍曹
班員	ボウ・ネーウィン、ボウ・ターヤー、ボウ・リンヨン、ボウ・モウニョウ、ボウ・ミャデイン		
第三班長	鈴木中尉	補佐	江藤軍曹
班員	アウンサン、ボウ・セッチャー、ボウ・レッヤー、ボウ・ゼーヤ		

訓練は、初歩的段階から出発しなければならなかった。²²⁵⁾ 軍事知識皆無の受講生に対し、普通なら3年かかる日本陸士の教育課程を、わずか1年で習得させるというのであるから²²⁶⁾、訓練はすこぶる激しいものであった。この時の訓練ぶりについて、ボウ・チョーゾー²²⁷⁾とボウ・ターヤー²²⁸⁾は、次のように述べている。

『海南島での軍事訓練は厳しかった。私達は、朝未明から夕方暗くなるまで、わずかな食事時間を除いて

218) Bo Min Gaung, p. 49; Ba Maw, p. 130; Bo Thein Swe, p. 144.

219) Bo Min Gaung, p. 50.

220) *Ibid.*, p. 51.

221) *Ibid.*, p. 51.

222) 泉谷達郎, p. 57; 太田常蔵, p. 41.

223) 泉谷, p. 58; Bo Ta Ya, pp. 14-15; 大野徹訳「志士三十人の帰国(1)」p. 64.

224) 訓練所の構成は、『南機関外史』; 泉谷, p. 58. 班の構成は, Bo Ta Ya, pp. 7-8, 14-15. なお, Ba Maw, pp. 132-133 の記述はやや異なる。

225) 泉谷, p. 59.

226) Bo Ta Ya, p. 10.

227) Helen G. Trager, pp. 176-7.

228) Bo Ta Ya, pp. 8-12; 大野徹訳「志士三十人の帰国(1)」pp. 64-66.

は訓練されずめだった。夜間演習は、週に3回もあった。訓練が激しくなるにつれて、私達の仲間からも訓練にあたっていた日本軍人の中からも、疲労で倒れる者が続出した。

日本側の待遇は、私達にはがまんできなかった。最初、私達は友人かお客さんのようにもてなされた。それが、後ではガラリと変わった。私達は、まるで部下であるかのようにとり扱われた。海南島のキャンプは、東京とは大違いであった。東京では、人々は礼儀と親切さに富んでいた。』

『われわれが受けた訓練は、生まれてこのかた最も劣悪で、最も疲労の激しい状態に全身を投げ入れることであった。起床は午前5時半、朝食と夕食の計1時間半の食事時間を除くと、あとは午後6時まで猛烈な訓練が続いた。夕食が済むと、9時までぎっしりと座学が続いた。学習が終わると夜間整列、そのあと30分の余裕をおいてやっと床に入れた。(中略)

けれども、熟睡中の真夜中12時、あるいは午前2時ごろに夜間演習があった。まず、各自完全武装して迎撃しなければならない。重機関銃が撃てるよう、素早く壕も掘らねばならない。鉄条網も張らされる。整列した時には寒くてガタガタふるえていたのに、壕を掘るため硬くて頑丈な海南島の土を掘っていると、まるで全身水をあびたように汗が流れ、手のひらが赤くなり血がにじんでくる。それなのに、敵の動静を探るためと称して2マイル以上も斥候に出なければならなかった。佐官や尉官クラスの教官たちが、あらゆる面から点検して、合格すればやっと“戦闘終了”の命令がおりて夜間の演習が終わるのであった。(中略)

ボウ・セッチャー、ボウ・レッヤーなどの年配者、虚弱者たちは、銃剣を着用しての疾走、戦闘訓練に、疲労困憊して口から泡をブクブクふいた。残りの同志たちも、祖国ビルマの解放のため、よろめきながらも訓練に耐えた。(中略)人間業とは思えないこれらの訓練に、精も魂も尽きはてて倒れる者、発熱するものが続出した。(中略)同志は、苦力に似ている第1班、泥棒に似ている第2班、サンパン漕ぎのインド人に似ている第3班と、お互いにからかい合いながら苦労をまぎらわし励ましあった。』

10月15日三亜訓練所が閉鎖され、「志士三十人」は11月7日台湾玉里に移った。²²⁹⁾ 10月12日フラペー、トゥンシェイン、エーマウン、バヂャン、トゥンキン、フラマウンの6名が潜入第1陣に選ばれ、タイ・ビルマ国境から潜入することになって東京経由バンコクに向かった。²³⁰⁾ そして11月24日、椎名、平石引率の第2陣6名(ソールイン、シュエ、トゥンシュエ、ティンエー、タンティ、ソウ)に出動命令が下され²³¹⁾、12月11日には南機関の機関員は全員バンコクに集結した。²³²⁾ 機関長は「ビルマ独立義勇陣」(Burma Independence Army)の編成構想を明らかにし、12月26日から募兵が開始された。²³³⁾

(3) ビルマ独立軍(BIA)の結成

「ビルマ独立軍」兵士の徴募は、1941年12月26日バンコク市サトゥン街ボルネオ館にある医師ウー・ルンペーの家で開始された。²³⁴⁾ 「志士三十人」は、同日午前11時ウー・ルンペーの家

229) 『南機関外史』p. 54; Bo Min Gaung, p. 164; 泉谷, p. 75.

230) Bo Min Gaung, p. 163; Ba Maw, p. 135.

231) *Ibid.*, p. 167.

232) 泉谷, p. 107; 『ビルマ攻略作戦』p. 117.

233) 泉谷, pp. 108-110; 『南機関外史』p. 60.

234) Sein Tin, p. 154.

に集まって、タイ医師の手を借り各人の腕から血液をとって銀の杯に入れ、各自回し飲みして²³⁵⁾「ビルマ独立のため戦う」ことを誓い合った。²³⁶⁾

バンコク市内には、当時亡命ビルマ人が住んでいた。²³⁷⁾「ビルマ独立軍」兵士の徴募が開始されるや、その日のうちに20名が応募、28日には50人が来て署名した。²³⁸⁾

「志士三十人」の一人タキン・フラマウン（ボウ・ゼーヤ）は、防諜のため各自のタキン名を変更したほうがよいと考え、そのことをタキン・トゥンオウに相談した。²³⁹⁾こうして、12月27日²⁴⁰⁾「志士三十人」に将校名が与えられることになり、タキン・アウンサンから発表された。²⁴¹⁾タキン・フラペー（ボウ・レッヤー）が記録をとった。

各人のタキン名、将校名、日本名および現状は、次のとおり²⁴²⁾である。

ビルマ名	将 校 名	日本名	現 状
タキン・アウンサン	ボウ・テーザ	面田 紋次	1947年7月19日暗殺
タキン・シューマウン	ボウ・ネーウィン	高杉 晋	現在、ビルマ革命評議会議長
タキン・フラペー	ボウ・レッヤー	谷 清	ウーヌ内閣副首相、逮捕、1968年釈放、バンコク亡命中
タキン・アウンタン	ボウ・セツチャー	平田 正雄	バンコク亡命、1969年客死
コウ・フラマウン	ボウ・ゼーヤ	加賀 正	ビルマ共産党中央委員、1968年4月16日射殺
タキン・パヂャン	ボウ・ラヤウン	馬場 武	白色PVO、1950年帰順、1969年7月9日死亡
タキン・ソールイン	ボウ・ミンガウン	山岡 清	黄色PVO、ウーヌ内閣僚、連邦党党首、逮捕、1968年釈放
コウ・トゥンシェイン	ボウ・ヤンナイン	山下 輝雄	パモー博士の女婿、バンコク亡命中
タキン・フラミヤイン	ボウ・ヤンアウン	糸田 貞一	ビルマ共産党中央委員、1967年12月16日粛清
タキン・サンフライン	ボウ・アウン	大村 忠	黄色PVO、ウーヌ内閣僚、連邦党、無職
コウ・シュエ	ボウ・チョーゾー	谷口 進一	陸軍参謀次長、1957年6月6日解任、無職
タキン・トゥンシュエ	ボウ・リンヨン	内海 進	無職
タキン・ティンエー	ボウ・ボンミイン	陳田 清次	黄色PVO、無職
タキン・アウンティン	ボウ・イエートウツ	林	ビルマ共産党、1963年帰順、BSPP

235) ビルマ語の「トゥエータウ」(血盟)の儀式。本稿 p. 226 参照。

236) Natmauk Hpon Gyaw, p. 182; Sein Tin, p. 158; Bo Min Gaung, p. 192.

237) 泉谷, p. 110; Bohmu Ba Thaung, p. 266; 『ビルマ攻略作戦』 p. 124.

238) Sein Tin, p. 154; Thakin Lwin, p. 109.

239) Sein Tin, p. 156.

240) Bo Min Maung, p. 185.

241) Mg Mg, p. 166.

242) 『南機関外史』 pp. 16-17; Bo Min Gaung, pp. 182-7; Sein Tin, p. 157; Mg Mg, p. 166; Mg Mg, *Constitution*, pp. 50-51, footnote; Thakin Lwin, p. 106; Bo Thein Swe, pp. 113-4; Bo Than Daing, pp. 146-7; 太田常蔵, p. 43; 日本側資料のビルマ名(カナ表記)には誤りが多いので補正した。各人の現状は筆者の調査による。Ba Maw, pp. 443-6 の記述にも若干の誤りがある。

タキン・トゥンキン	ボウ・ミインスエー	中村 等	現職不明
タキン・サンミヤ	ボウ・タウティン	中川 一郎	国会議員, 1964年逮捕, 釈放
コウ・フラ	ボウ・ミンヤウン	伊藤 仁	STB特別官
タキン・タンニョン	ボウ・ジンヨー	大川	PVO, 連邦党, STB特別官
タキン・エーマウン	ボウ・モウ	水野 三郎	戦死 (プーヂー)
タキン・トゥンルイン	ボウ・バラ	大谷 広	国会議員, 1963年逮捕, 67年釈放, 無職
タキン・キンマウンウー	ボウ・ターヤー	門屋 勝	PVO, 共産党, 1949年帰順, 作家
タキン・ティツ	ボウ・ソーナウン	大沢	ボウ・ソーアウンの弟, 通産省監査局特別官
タキン・グェー	ボウ・ソーアウン	桂	戦死 (シュエヂン)
タキン・マウンマウン	ボウ・ニャーナ	土屋	戦死 (パーブン)
タキン・タンティン	ボウ・ミャディン	坪田	病死 (チェンマイ)
タキン・トゥンオウ		市原 一郎	1970年1月4日死亡
タキン・チャーセイ	ボウ・モウニョウ	高橋	病死
コウ・サウン	ボウ・ティンウィン	門屋 博	病死 (バンコク, 1945年)
タキン・ソウ	ボウ・ミインアウン	河野	戦後自殺
タキン・タンティン	ボウ・タンティン	山田	病死 (台北)

12月27日入隊式が挙行され²⁴³⁾, ここに「ビルマ独立義勇軍」(Burma Independence Amy)が, 編成されたのである。募集した兵士達には, チャーゾー少佐が日本式の軍事訓練を授けた。²⁴⁴⁾ ビルマ独立軍編成当初の人数は200名²⁴⁵⁾であったが, これに鈴木大佐 (ビルマ語名ボウ・モウヂョウ) 以下74名の日本軍将校, 下士官, 軍属が加わった。

義勇軍の陣容は次のようになった。²⁴⁶⁾

B I A軍司令官	ボウ・モウヂョウ大将 (鈴木敬司大佐)
参 謀 長	村 上 少 将 (野田毅大尉)
高 級 参 謀	ボウ・テーザ少将 (アウンサン)
参 謀	ボウ・ヤンアウン中佐
参 謀	ボウ・セッチャー大佐
参 謀	タキン・トゥンオウ
作戦主任参謀	飯 島 大 佐 (木俣囑託)
ク	新 免 中 佐 (水谷囑託)
高 級 副 官	木 村 中 佐 (樋口囑託)

243) 太田 (1967), p. 44; 『ビルマ攻略作戦』 p. 124; 『南機関外史』 p. 60.

244) Sein Tin, p. 159.

245) 高橋八郎氏談; 『ビルマ攻略作戦』 p. 124; 『南機関外史』 p. 65.

246) Bo Min Gaung, pp. 198-200; Sein Tin, pp. 164-165; 『ビルマ攻略作戦』 p. 124-125; 『南機関外史』 pp. 65-66; 太田, pp. 44-45; 泉谷, pp. 112-114; Bo Thein Swe, p. 148.

経 理 部 長	南 岡 大 佐（杉井囑託）
軍 医 部 長	鈴 木 少 将（鈴木医師）
運 輸 部 長	ボウ・フムーアウン中佐
モールメン兵団（司令部直轄）	
北島部隊（前衛）	北島大佐（高橋八郎中尉） ボウ・ソーアウン，ボウ・ミャディン
鈴木部隊（本隊）	鈴木大佐（鈴木八郎中尉） ボウ・チャーゾー，ボウ・ソーナウン
稲田部隊（後属）	稲田中佐（稲田義信少尉） ボウ・モウ，ボウ・イエートウツ
平 隊	平 少佐（平石正美軍曹） ボウ・ジンヨー
木迫隊	木迫少佐（木迫順一軍曹）
大坪部隊	大坪大佐（山本中尉）
タボイ兵団	川島中将（川島威伸大尉），兵員70～80名 ボウ・レッキヤー大佐，ボウ・ラヤウン中佐，ボウ・ミンヤウン，ボウ・ニャーナ
泉谷部隊	泉谷中佐（泉谷達郎中尉）
塔本部隊	塔本中佐（塔本成幸中尉）
メルギー支隊	徳永中佐（徳永政夫囑託），兵員10名
水上支隊	平山大佐（平山季信中尉），兵員約20名 ボウ・アンナイン，ボウ・ミンガウン，ボウ・タウテイン
田中（謀略）部隊	田中中佐（田中征六郎中尉），兵員10名 ボウ・ボンミイン
国内擾乱班 ²⁴⁷⁾	ネーウィン中佐，兵員8名 ボウ・ターヤー，ボウ・リンヨン，ボウ・ミンスエー，ボウ・モウニョウ

ビルマ独立軍各部隊は、12月31日バンコクを発進、3隊に分かれて日本軍第55師団と共にビルマに進撃した。²⁴⁸⁾ この時のB I Aの兵力は、3,776人²⁴⁹⁾であったが、タイ国内で応募した兵士はその内の642人が戦死、400名が負傷、無事ビルマに辿り着いたのは100名くらいであった。残りの兵士は、全員タイ国へ戻って行った。²⁵⁰⁾「志士三十人」の中からも、ニャーナ少佐（タキン・マウンマウン）はパープンで、タキン・エーマウン（モウ少佐）はプーギーで、タキン・グエー（ソーアウン少佐）はシュエヂンで、それぞれ戦死した。²⁵¹⁾

編成当初わずか200名にすぎなかった「ビルマ独立軍」も、ラングーンを占領した1942年3月8日²⁵²⁾には、1万5千くらいの人数になっていた。²⁵³⁾

247) 擾乱班は1942年1月25日ビルマ入国に成功した。Thakin Lwin, p. 117.

248) Natmauk Hpon Gyaw, p. 183; 『ビルマ進攻作戦』 p. 120; Ba Maw, p. 141.

249) Thakin Lwin, p. 109; Bo Thein Swe, p. 151; Ludu U Hla, Vol. 1, p. 37.

250) *Ibid.*, p. 109.

251) Sein Tin, p. 172.

252) Bohmu Ba Thaung, p. 268; Bo Thein Swe, p. 151; U Hla, p. 47; Desai, p. 260; 太田, p. 46; 『秘録大東亜戦史ビルマ篇』 p. 34.

253) Bohmu Ba Thaung, p. 269; 文献によっては必ずしも一致しない。『南機関外史』と太田, p. 45 では正規兵約1万、便衣兵約10万; 泉谷, p. 187 では1万2千; 『ビルマ攻略作戦』 p. 134 では4800人となっている。

ラングーン占領後、鈴木大佐はビルマ独立軍を北伐のため再編成し、それまで日本人将校が指揮していた全部隊をビルマ人の指揮官と交替させた。²⁵⁴⁾ それは次のような編成²⁵⁵⁾であった。

ビルマ独立軍司令官 アウンサン少将

第 1 師団（3 個連隊）ネーウィン大佐

連隊長 ネーウィン大佐（兼任）ボウ・ボンミイン、ボウ・アウンヂー

第 2 師団（3 個連隊）ゼーヤ大佐

連隊長 ボウ・ヤンアウン、ボウ・ミインアウン、ボウ・イエートゥッ

独立 1 個連隊 ボウ・ヤンナイン

ラングーン駐留部隊 ボウ・チャーゾー

ラングーンからイラワジ川にかけての地域は、ボウ・ゼーヤの第 2 師団が担当、各連隊をヤンアウン、ミインアウン、イエートゥッが指揮した。²⁵⁶⁾ ネーウィン、ボンミイン、アウンヂーの諸部隊も、北進を続けた。ヤンナインの部隊は、陸路レッパダン、パウンデー、シュエタウソへと進撃した。²⁵⁷⁾ タイエツ町をゼーヤ、ヤンナインの 2 部隊が占領、プロームからはヤンアウンの部隊がアラカン方面（タウンゴウ、タンドゥエー、シットゥエー）へと向かった。²⁵⁸⁾

1942 年 5 月 29 日北伐作戦が終わってバモーに集結したところ、ビルマ独立軍の兵力は 2 万 7 千名くらいに増大していた。²⁵⁹⁾

参 考 文 献

（和・漢文）

『元史』卷二百十

『元朝征緬録』

『元史外夷伝』

『欽定宋史』卷四百八十九

『明史』卷三百十五

『聖武記』卷六「乾隆征緬甸記」

『国朝柔遠記』卷五

白鳥芳郎「元朝征緬録に見えたるシャン族の動向」『東洋学報』Vol. 37, No. 1, 1954, pp. 69~111.

山本達郎「元の緬甸経略」『史学雑誌』第 51 篇, 第 7 号, p. 944.

エドワード・ゲイト著・民族学協会訳『アッサム史』東京, 1945.

張鳳岐著・種村保三郎訳『雲南国境紛争史』東京, 1943.

防衛庁防衛研修所戦史室編『ビルマ攻略作戦』東京, 1967.

254) 『ビルマ攻略作戦』p. 447; 太田 (1967), p. 48.

255) *Ibid.*, p. 447; Bo Thein Swe, p. 154.

256) Bo Thein Swe, p. 154.

257) *Ibid.*, p. 155; Ba Maw, p. 163.

258) *Ibid.*, p. 156; Ba Maw, p. 203.

259) 『ビルマ攻略作戦』p. 448; Bohmu Ba Thaug, p. 269 では 2 万 3 千; Ludu U Hla, Vol. 1, p. 53 では 7 月 27 日現在の推計人員 3 万人。Bo Thein Swe, p. 151 では約 2 万 5 千人となっている。

- 陸戦史研究普及会編『ビルマ進攻作戦』東京，1968。
『秘録大東亜戦史ビルマ篇』東京，1953。
久野 暢『タイ・ビルマ現代政治史研究』京都，1968。
国分正三『大緬甸誌』下巻，東京，1944。
緬甸国軍軍事顧問部編『南機関外史』1944。
泉谷達郎『ビルマ独立秘史・その名は南謀略機関』東京，1967。
太田常蔵「ビルマ独立に対する日本指導の二重性格について」『史海』第11号，pp. 1～11。
太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』東京，1967。
大野 徹「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史」『東南アジア研究』7巻3号，1969，pp. 363～390。
大野 徹「ビルマ共産党の現状」『東南アジア研究』6巻3号，1968，pp. 156～168。
大野 徹訳「アウンサン将軍(Ⅱ)」『鹿大史学』第15号，1967，pp. 41～61。
大野 徹訳「三十人志士の帰国(Ⅰ)」『鹿児島大学史録』第2号，1969，pp. 61～97。
荻原弘明「ビルマの年代記について」『歴史教育』12-12。
荻原弘明「マンナン・ヤーザウインー第5部146章から150章までの訳一」『鹿児島大学文理学部文科報告』第10号，史学篇第7集。
荻原弘明「ウー・オッタマ著：中国と日本(Ⅱ)」『鹿大史学』第13号，1965。

(欧文)

- Ba Maw. 1968. *Breakthrough in Burma, Memoir of a Revolution 1939-1946*. Yale Univ. Press.
Bo Kyaw Zaw. 1969. "In Training," *We the Burmese, Voices from Burma* (edited by Helen G. Trager). New York.
Butwell, Richard. 1963. *U Nu of Burma*. Stanford Univ. Press.
Cady, J. F. 1958. *A History of Modern Burma*. Cornell Univ. Press.
_____. 1964. *Southeast Asia, its historical development*. New York.
Chaalour, A. L. d'argé. 1825. *voyage du capitaine Hiram Cox dans l'empire des birmans*. Paris.
Coedès, G. 1966. *The Making of South East Asia*. London.
Collis, Maurice. 1956. *Last and First in Burma (1941-1948)*. London.
_____. 1938. *Trials in Burma*. London.
_____. 1953. *Into Hidden Burma*. London.
Crawford, John. 1829. *Journal of an Embassy from the Governor General of India to the Court of Ava in the year 1827*. London.
Crosthwaite, Charles. 1968. *The Pacification of Burma*. London.
Denny, J. A. 1956. *Chindit Indiscretion*. London.
Desai, W. S. 1961. *A Pageant of Burmese History*. Calcutta.
Doveton, F. B. 1852. *Reminiscences of the Burmese War in 1824-5-6*. Taunton.
Dupuy, Trevor Nevitt. 1965. *Asiatic Land Battles; Allied Victories in China and Burma*. London.
Fergusson, Bernard. 1964. *Beyond the Chindwin*. London.
Fielding, H. 1898. *The Soul of a People*. London.
Foucar, E. C. V. 1946. *They reigned in Mandalay*. London.
_____. 1956. *I lived in Burma*. London.
Furnivall, J. S. 1956. *Colonial Policy and Practice*. New York Univ. Press.
_____. 1957. *An Introduction to the Political Economy of Burma*. Rangoon.
Hall, D. G. E. 1956. *Burma*. London.

- _____. 1966. *History of South East Asia*. New York.
- Harvey, G. E. 1925. *History of Burma*. London.
- _____. 1946. *British Rule in Burma 1824-1942*. London.
- _____. 1954. *Outline of Burmese History*. Calcutta.
- Htin Aung. 1965. *The Stricken Peacock; Anglo-Burmese Relations 1752-1948*. The Hague.
- _____. 1967. *A History of Burma*. Columbia Univ. Press.
- Huber, M. Edouard. 1904. "une ambassade chinoise en birmanie en 1406," *BEFEO*, pp.429-432.
- _____. 1909. "la fin de la dynastie de Pagan," *BEFEO*, ix, pp.634-680.
- Imbault-Huart, M. C. 1878. "Histoire de la conquête de la birmanie par chinois," *Journale Asiatique*, tome xi, pp.135-178.
- Masfield, John. 1926. *Travels of Marco Polo*. London.
- Matthews, Geoffrey. 1966. *The Reconquest of Burma, 1943-1945*. Aldershot.
- Maung Maung. 1958. *Burma in the Family of Nations*. Amsterdam.
- _____. 1961. *Burma's Constitution*. The Hague.
- Pauthier, M. G. 1865. *le livre de Marco Polo*. Paris.
- Pe Maung Tin & G. H. Luce. 1960. *The Glass Palace Chronicle of the Kings of Burma*. Rangoon.
- Phayre, Arthur. 1884. *History of Burma*. London.
- Prasad, Bisheshwar. 1958. "The Reconquest of Burma," *Official History of the Indian Armed Forces in the Second World War 1939-1945*. Vol. 1, Calcutta.
- Scott, J. S. 1911. *Burma: A Handbook of Practical Information*. London.
- Shwe Yoe. 1927. *The Burman, His Life and Notions*. London.
- Singhal, D. P. 1960. *The Annexation of Upper Burma*. Singapore.
- Smith, Donald Eugene. 1965. *Religion and Politics in Burma*. Princeton.
- Thakin Nu. 1954 *Burma under Japanese*. London.
- Tinker, Hugh. 1961. *The Union of Burma: A Study of the First years of Independence*. Oxford Univ. Press.
- Tin Ohn. 1962. "Modern Historical Writing in Burmese 1724-1942," *Historians of South East Asia* (edited by D. G. E. Hall). London.
- Trager, Frank N. 1966. *Burma: from Kingdom to Republic*. New York.
- U Ba U. 1959. *My Burma, the Autobiography of a President*. New York.
- U Tet Htoot. 1962. "The Nature of the Burmese Chronicles," *Historians of South East Asia* (edited by D. G. E. Hall). London.
- Woodman, Dorothy. 1962. *The Making of Burma*. London.
- Yule, Henry. 1858. *A Narrative of the Mission sent by the Governor General of India to the Court of Ava in 1855*. London.
- _____. 1903. *The Book of Ser Marco Polo*. London.

(ビルマ文)

- Binnya Dala. 1922. *Razadarit Ayaydawbon*. Mandalay.
- Bohmu Ba Thauung. 1967. "Bama Tawhlanyay Thamaing," *A History of Burma's Revolutionary Struggles*. Rangoon.
- Bo Min Gaung. 1968. *Bogyok Aungsan ne Yebaw Thongyeit (General Aungsan & the Thirty Comrades)*. Rangoon.

- Bo Ta Ya. *Yebaw Thongyeit Pyidawpyan (Return of the Thirty Comrades)*. Rangoon.
- Bo Than Daing. 1967. *Lutlatyay Ayaydawbon Hmattan*. Rangoon
- Bo Thein Swe. 1967. *Lutlatyay Taikpwe (Independence War)*. Rangoon.
- Bo Tun Hla. *Bogyok Aungsan*. Amsterdam.
- Bo Zin Yaw. "Wazouga Htwetkhedi Lutlatyay," *Amyotha Thadinzin* 3-8-1957.
- Furnivall, J. S. & Pe Maung Tin. 1960. *The Garland of Zambudipa*. Rangoon.
- Hmannan Maha Yazawindawgyi*, Vol. 1, Mandalay. 1963 ; Vol. 2, Rangoon. 1967 ; Vol. 3, Rangoon. 1968.
- Letwe Nawyahta. 1967. *Hsinbyumyashin Ayaydawbon (Myammaminmya Ayaydawbon)*. Rangoon.
- Letwe Nawyahta & Twindindaiwun. 1961. *Alaunghpaya Ayaydawbon*. Rangoon.
- Ladu U Hla. 1968. *Thadinza Pyawpya de Sittwin Bamapyi (War-time Burma as spoken by Newspapers)*. Mandalay.
- Maha Atula. 1967. *Nyaunyanmin Ayaydawbon (Myammaminmya Ayaydawbon)*. Rangoon.
- Mya Kay Tu (U Chan Mya). 1966. *Nan Dalay Hmattan*. Rangoon.
- Nai Pan Hla. 1969. *Razadarit Ayaydawbon*. Rangoon.
- Natmauk Hpon Gyaw. 1967. *Shekhit Myamma Tatmadaw Hmatsumya (Documents on the Ancient Burmese Army)*. Rangoon.
- Sagain Han Tin. *Lonwa Lutlatyay doe (Toward the Perfect Freedom)*. Rangoon.
- Shin Maha Thila Wuntha. 1965. *Yazawingyaw (Celebrated Chronicle)*. Rangoon.
- Taw Sein Ko. 1960. *Records of the Hluttaw*. Rangoon.
- Tekkadoe Aye Than. 1969. *Kolonikhit-u Tawhlanyay Thamainwin Azanimya*. Rangoon.
- Thakin Lwin. 1969. *Japan Khit Bamapyi*. Rangoon.
- Than Tun. 1961. *Ngachongkhyam*. The University Teachers' Review, Vol. 1, No. 1, pp. 1-6.
- _____. 1969. *Shekhit Myamma Yazawin (Ancient History of Burma)*. Rangoon.
- U Ba Yin. *Sayadaw U Uttama*. Amsterdam.
- U Kala. 1960. *Maha Yazawindawgyi*, Vol. 1. Rangoon.
- _____. 1965. *Yazawingyok (Concise Chronicle)*. Rangoon.
- U Mya. 1961. *Votive Tablets of Burma*. Rangoon.
- U Pe Maung Tin. 1953. *Kinwun Mingyi's London Diary*, Vol. 1. Rangoon.
- U Sein Lwin Lay. 1968. *Mintaya Shwehti and Bayinnaung*. Rangoon.
- U Sein Tin. 1968. *Yebaw Thongyeit Mawgun*. Rangoon.
- U Soe Maung. 1955. *Wungyigyok U Nu*. Amsterdam.
- _____. 1956. *Wuntho Sawbwa*. Amsterdam.
- Yebaw Hla Myo. 1968. *Pyidaungzu Myamma Nainggan Thamainwin Sagyok Sadanmya (Historical Documents and Treaties of Burma)*. Rangoon.